



統

一

法財人團

統

一團

發行

目 次

聖 語

聖訓摘要……………日生上人

日什正師諷誦章講話(其二)……………梶木顯正

日生上人第三回忌法要記事

日生上人の追憶と其將來に對する希望……………姉崎正治

○各地教信 ○寄附團費誌料領收

第三十八年四月號

聖 語

去る建長五年^{大鎌}四月二十八日に、安房國長狹郡の内東條の郷今は郡なり、天照太神の御くりや、右大將家の立て始め給ひし日本第二のみくりや、今は日本第一なり、此郡の内清澄寺に申す寺の諸佛坊の持佛堂の南面にして、午の時に此法門申しはじめて今に二十七年弘安二年^{大鎌}なり、佛は四十餘年、天台大師は三十餘年、傳教大師は二十餘年に出世の本懷を遂げ給ふ、其中の大難申す計りなし、先々に申すがごとし、予は二十七年なり、其間の大難は各々かつしろしめせり、法華經に云く 而此經者如來現在猶多怨嫉況滅度後云云。

(聖人御筆抄)



日生上人第三回忌に際し床次前大臣の感話

聖訓摘要

下山御消息

日生上人

この御書は大切な教義をいろ／＼とお示しになつて居るので、大分長い御文章であります。その中の要文を摘出すれば多々ある譯でありまされども、今は殊に注意すべき點を二三申上げて見ようと思ふ。經文の如く讀誦する日蓮をいかれるは、經文をいかれるにあらずや。佛の使を輕しむるなり。

(縮刷遺文録一五六九)

これは日蓮聖人に迫害を加へるのは、日蓮聖人個人が悪い事をするといふ點を憎んで責めるのではなくして、日蓮聖人が法華經の通りに佛教を解釋し、法華經の教に基いた主張をなせることを憎んで迫害を加へるのであるから、それは日蓮を虐めるのでは無くして、法華經の趣旨を傷けるものであるといふ事を仰せられるのである。經文の通りに言ふ日蓮を憎むのは、取も直さず經文を憎むことになりはしないか。さうして日蓮を斯の如く苛く迫害するといふことは、佛の使を輕しむるものである、日蓮は佛の使として佛様の仰せられた通りの事をやつて居るのである、恰度勅使が 天皇の使としてお出にな

つて、勅命を傳へる場合に、その勅使を侮辱すればそれは勅命違反のことである、それと同じ譯であるといふ意味を仰せられて、茲には佛の使といふ事を明白にお書きになつて居る。

去る正嘉元年に書を一卷注したりしを、故最明寺の入道殿に奉る。御尋もなく御用ひもなかりしかば國王の御用ひなき法師なれば、あやまちたりとも科あらじと思ひけん、念佛者竝に禮那等又さるべき人人も同意したるとぞ聞へし。夜中に日蓮が小庵に數千人押し寄せて殺害せんとせしかども、いかにんがしたりけん其の夜の害もまぬがれぬ。然れども心を合せたる事なれば、寄せたる者も科なくて、大事の政道を破る。日蓮が生きたる不思議なりとて伊豆の國へ流しぬ、されば人の餘りに憎きには我が滅ぶべき科をもかへりみざる歎、御式目をも破らるゝ歎。(繪圖遺文錄)

これは「安國論」を捧呈なさつたのを時の北條が用ひない、さうして却つて憎しみを加へるやうな態度であつたが故に、そこで念佛門徒等は、お上に於ても日蓮を斯様に憎んで居られるのだからといふ所からして、権力ある者と結んで日蓮を虐めやうとかゝつた。そこで即ち松葉ヶ谷の庵室焼打事件といふことが起つたのである、夜中に日蓮の小庵に數千人の者共が押し寄せて日蓮を殺さうとしたが、不思議な事あつてその晩の害も通れた譯である。けれどもこれは「さるべき人々も同意したるとぞ聞へし」で、時の役人が内部から賛成をして居つたことであるが故に、左様な無法な事をして日蓮の庵室を焼き、日蓮を焼き殺さうとするやうな事をしてもお咎めもなさらず、取調もなさらない。さうして却つて日蓮が

生きて居るのが不思議だと言つて、尙ほ憤を加へて伊豆の國に流し者といふことになつた。伊豆の伊東へ御流罪といふ事は諸君の御承知の通り突然の事で、何の沙汰も無くして日蓮聖人を無理無體に船に乗せて伊豆の國に流してしまつたのである。それは御文章に依ると、松葉ヶ谷の焼打をやつて、庵室と共に焼けて灰になつた筈の日蓮が、何處か山の方に——今もお猿島といつて残つて居るが、猿が伴つて行つたといふやうに傳へられて居るが、それはどうか判らぬ、或は左様な事は後から加へた事かも知れんけれども、兎に角何處か山の方に逃れて、焼けたと思ふた日蓮聖人が生きて居つて出て來た、これは不思議だ、こんな筈ではない」といふので、又捕へて伊豆の伊東に流したといふ譯である。これは尤も武斷壓制の鎌倉時代のことでありますから、左様な無法な態度に出でたものだと思ひますが、それを日蓮聖人が「御式目をも破らるゝか」と言はれて居る。後年起つた龍の口の頭の座も、やはり式目違反といふ事になるのである。「式目」といふのは北條泰時の拵へた北條式目といふ五十一箇條から成る當時の法律である。それには僧侶を新様な慘酷な事に取扱ふことの無いやうにといふ規則が出来て居る、この式目五十一箇條といふものは聖徳太子の十七憲法を本にして、その一箇條を三箇條づゝに引伸ばしたものである、即ち三箇條づゝ十七箇條で恰度五十一箇條になる、だから聖徳太子の憲法をその儘引伸ばしただけに過ぎない、その十七憲法の第二條には「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり」とあるのであつて三寶を敬ふ所の精神から、北條泰時の式目には、やはり坊さんを無闇に捕へて流すとか、夜殺して居る所

を襲ふて焼き殺すとか、頸の座に引出すとかいふやうな事は、當時の法律からいへば許すべからざることであつたのである。それ故に前年重野安禪といふ博士が、龍の口法難は無かつたといふ事を唱へたがその時に「當時の法律に無いことを北條政府がやる譯が無い」と言ふて、龍の口法難抹殺論の證據の一つにこの式目を挙げたが、それは當時の政府が式目を破つて斯様な無法な事をやつたといふことを、重野博士が知らなかつたのである、それは日蓮聖人の御遺文には「御式目をも破らるゝか」といふ事が明かに書かれて居る、これは度々出て来る言葉である、殊にこの『下山鈔』に於ては「大事の政道を破る」と言ひ「御式目をも破らるゝ歟」と言ひ、即ち政治の掟をも破つて甚だ不都合の事をしたといふことが明白に出て居るので、この事は『下山鈔』に於て立證される所の大事な點である。モウ今後再び重野博士のやうな人も出まいけれども、皆忘れてしまふといふとどんな者が出て来るか判らない。

余は日本國の人人には、上は天子より下は萬民にいたるまで三つの故あり、一には父母なり、二には師匠なり、三には主君の御使なり。經に云く即ち如來の使なりと、又云く眼目なりと、又云く日月なりと、章安大師の云く彼が爲めに惡を除くは則ち是れ彼が親なり等云々。而るに謗法一闢提國敵の法師原が謗言を用ひて、其の義を辨へず、左右なく大事たる政道を曲げらるゝは、態と災禍をまねかるゝ歟、はかなしはかなし。(繪圖遺文註 一五七五)

これは日蓮は日本國の人々の爲めには三つの故がある、一つには父母であり、二つには師匠であり、

三つには主君であり、主師親の三徳を有つて居ると仰せられた。そこでこの意味合ひを能く了解して置かんければいかぬ、日蓮が「主師親三徳ちや」と言つたからといつて、釋尊の主師親の徳を蹴るやうなことをいふ者がある、それが「下山鈔」から起つて来る間違ひである。これは奥門派が第一に言ふたのであるが、近頃は日蓮宗の河合日辰師でも奥門派の尻馬に乗つて言ふて居るし、誰も彼もそんな事を言ふて居る、洵に日蓮教學は混亂の状態であるが、それは「下山鈔」一つが判らぬといふ者である。主師親と仰しやつたからと言ふて、無闇やたらにそれを言ひ募ると、それはやはり邪説といふことになる。日本國の一切衆生の爲めにどういふ意味に於て日蓮聖人が主師親の徳があるかといふと、茲に書いて居られる通り「主君の御使なり」と言はれて居る、教主釋尊は「今此の三界は皆是れ我が有なり」と仰せられて、本佛としての釋尊はこの全法界を支配して居る所の方である、随つて日本の國もやはり佛様の大きな御働きの中に在るものであるから、そこで「經に云く即ち如來の使なり」といふ言葉を擧げて、主君といふ言葉を立證されて居る、その意味に於て主君と言はれるのである。それから「父母なり」といふことは何處から言はれたかといふと、章安大師の釋を擧げられて「彼が爲めに惡を除くは即ち是れ彼が親なり」と章安大師が言ふて居る、間違つたものを教へて行くのはそれが本當の親切である、方便の教に囚はれて居つてもその儘にして置くといふのは、寧ろ親切が足らぬ者だといふ、そこで日蓮は間違ひは間違ひだと教へて行くのは、恰度親の親切を有つて居る者ちやといふので、思想の混亂を救はる

、點、その誤れる者を諷めて正しき教を與へられる點の親切を親ぢやと言はれるのである。即ち邪説を破つて正法を宣傳する上から親といふことを言はれるのである。これは釋尊が一切衆生は悉く是れ我が子なりと言はれたその意味と少しも衝突する譯ではない。寧ろ間違つてもその儘に放任して置く、所謂八方美人主義といふか、お座なりのに、思想が混亂に陥つて行くのを傍觀座視するといふのは、却つて親切が足らない。日蓮は迫害を忍んで命に代へても正義を正義として主張する、そこに精神問題に於ての親の如き親切を有つて居るぞといふことを言はれたのである。それから師匠といふ事は、これは最も見易いことで、法華經の教に依つて一切衆生を導く者は、日月の光が闇を除くが如くに、一切衆生の心の闇を除くものだと法華經神力品にもあるからして、法華經に依つて人々の精神界を教へ導く點に於て師匠といふ事を言はれた。それは誰も反對の出来ないことである、日蓮出でて日本に法華經の心髓を發揮し、佛教の正統を發揚せられた上に於て、日蓮聖人が思想界に於てのお師匠様であるといふことは、誰も反對の出来ない事である。能く諒解したならば日蓮が慢心で言ふ譯でも何でも無い、日蓮はこの意味に於て汝等の爲めに父母の如き精神的親切があり、教を與へる點に於て師匠であり、釋尊の使であるからして「主君の使なり」といふことを言ふて居る、それがこの御文章に於て頗る明白である。さうして經文を擧げられて「經に云く如來の使」と言ひ、章安大師の釋を擧げて説明せられて居る。左様に日蓮は日本に取つては尊い意味を持つ者を、政道を枉げて迫害を加へるといふ事は洵に間違つたこと、思

ふ、親を苦しめ、主人の使を苦しめ、師匠を侮る罪になる、主師親の三徳の日蓮を苦しめるといふことは有るべからざることではないかと言はれたので、これは釋尊の絶對の主師親三徳の思想——全宇宙を支配し、さうして一切衆生を本當に精神の子として見る關係、又一切經を開いて本師釋尊としてのその師匠を蹴つて、日蓮が師匠といふ譯ではないのであるから、釋尊の三徳を壓迫して日蓮の三徳を説くやうなへまな議論をやつてはいかぬ。それは何派の者が言ふても誰が言ふてもそんな議論は邪説であるそんな無茶な事を日蓮門下で言ふては天下に通用しはしない。

釋尊多寶十方分身の諸佛の、或は共に宿し或は衣を覆はれ、或は守護せんと、懇ろに説かせ給ひしをも、實歎噓言歎と知りて信心をも増長せんと退轉なく勵みし程に、案にたがはず去ぬる文永八年九月十二日に都て一分の科も無くして佐渡の國へ流罪せらる。外には遠流と聞へしかども、内には頭を切ると定めぬ。余又兼ねて此の事を推せし故に、弟子に向つて曰く、我が願既に遂げぬ悦び身に餘れり人身は受けがたくして破れ易し、過去遠劫より由なき事には失ひしかども、法華經の爲めに命を捨てたる事はなし。我れ頭を刎ねられて師尊者が絶へたる跡を繼ぎ、天台傳教の功にも超へ、付法藏の二十五人に一を加へて二十六人となり、不輕菩薩の行にも越へて釋迦多寶十方の諸佛に如何せんとなげかせ參らせんと思ひし故に、言をも惜まず已前にありし事、後に有るべき事の様を平の金言に申し含めぬ。(續編遺文錄) 一五七七

これも日蓮聖人の御傳記中の大事な點でありまして、法華經には、法華經の行者とは佛様が一緒に寝んで下される、假令流し者になつて居つても、雪の中に閉ぢ籠められて居つても、佛様が一緒に居ても、佛様がお助け下されるといふことが説いてあるが、果してこの經文の通りに感應利益のあるものか無いものかを實驗して、所謂身に體驗して法華經の信仰を一段と高めやうと自分は考へて居つた。唯だ經文に説いてあるから有難いといふだけでは信心が本當に起らぬから、實行に移して試みて、さうして信仰を増して行くやうにしたいと思ふて居つた。所が果せる哉去ぬる文永八年九月十二日、一分の科もなくして佐渡ヶ島に流されるといふことになつた、それは表面流罪といふ事であるにも拘らず、やはり政道を枉げて、十二日の夜は龍の口に引出し頸の座に引据ゑて、平の左衛門頼綱は何とかして日蓮聖人を殺さうとしたのであるけれども、これも不思議な事あつて遂に頸を切ることが出来なかつた。さうして佐渡の地頭の本間六郎重連にお預けになつて、依智の方へお出でになつたのであるが、愈々文永八年九月十二日の法難が最も強く現はれた譯である。その時日蓮聖人は弟子に向つて「我が願すでに遂げぬ悦び身に餘れり」——愈々法華經の爲めに頸の座に据ゑられ或は流され、一身を犠牲にする時が來た、考へて見ればこんな嬉しいことはない、何故かと言へば人間の身には容易に生れることが出來んやうなものだけれども、生れかはり死かはりする間には、度々人間にも出たのであらう、けれども何時も各つた

れの了簡で、唯だ一日でも生き永らへたいと思ふて譯も無く執着の心を起して、さうして終ひには年老つて死んだか、病氣で死んだか、知らぬけれども、何の役にも立たずに死んでしまふ、その死は一文の價値も無いことに依つて命を取られたのである。その命を法華經に捧げて廣大無邊の功德とその生命を取り換つてを以て、日蓮が頸を刎ねられることに依つて、佛敎の聖者師子尊者の絶えたる後を繼ぎ、天台傳敎の功にも超えた程な立派な仕事をし、不輕菩薩の働きにも越えたやうな事をして、お釋迦様や大勢の佛様が、日蓮の効績はどの位のものであらうかといふ事の御相談をなさらんければ、その効績の程度が判らぬ程なる手柄を擧げて見たいと考へたと言はれる、實にこの抱負、この決心は大きなものである。大抵の者ならば、師子尊者が法の爲めに頸を刎ねられたとか、不輕菩薩が杖木瓦石の難を受けたといふことを聞けば、却つて恐れを懐くものであるが、日蓮聖人はそれにも増したる効績を現はし、釋迦如來、多寶如來はじめ諸佛が集つて、日蓮の効績はどの位のものであらうかと御相談をなさらんければならぬ程な事をして見たい、さうしてあれ程の法華經に熱心なる者を、頸の座に据ゑたり流し者にしてその儘にして置いてはいかぬから、何とかして救はなければならぬ、諸天善神も早く進んで利益を垂れよと言つて、特別會議を佛様がお聞きになるやうな事一つやつて見たいものだといふ、この意氣込みが實に立派な事である。唯だお手柔かにかお助け下さいといふ弱音を吐くのではない、大いに手厳しく法難迫害が起つて、佛様が特別會議をお聞きになるやうな殊勳を奏して見たいと思ふて、日蓮は

今日までやり來つた、それが事實に現はれて今日は愈々頭の座に坐るといふことになつた、定めし釋尊や諸佛の前に於ても今や特別の會議が開かれて居るに違ひない。これは實に宗教の決心及びその情操の發露として日蓮聖人自らお書きになつて居るのであります。洵に感激に堪へぬお言葉であります。吾々も是れ程には行かないでも、この味ひを酌み別け得て、始めて其處に宗教の信仰の妙味が現はれて來ると思ふのであります。

去ぬる文永十一年二月に佐土の國より召し返されて、同じき四月の八日に平の金吾に對面して有りし時、理不盡の御勘氣の由委細に申し含めぬ。又恨らくは此の國すてに他國に破れん事の淺間しさよと歎き申せしかば、金吾が云く、何の頃か大蒙古は寄せ候べきと問ひしかば、經文には分明に年月を指したる事はなけれども、天の御氣色を拜見し奉るに、以の外に此の國を睨みさせ給ふか、今年は一定寄せぬと覺ゆ。(維新遺文録 一五七九)

この一節は平の金吾即ち頼綱に對して、佐渡ヶ島から御赦免になつて歸られて、鎌倉の殿中に出られた時に仰しやつた事でありますが、この時は流石の北條も今迄の無禮な態度に似ずして、非常に叮嚀に日蓮聖人を待遇して、時の將軍時宗も簾の中からこの頼綱との對話を聽いて居つたのであります。それでも日蓮聖人は「日蓮を用ひぬるとも悪しく敬はく國亡ぶべし」(種々御振舞御書)と言つて居る。唯だ御馳走を食はして大きな寺を建て、やるから穩かにやれといふやうな事を言ふが、穩かとは何事であるか、

日蓮の主張して居る事は、日本の國體を破らないやうに皇室の尊嚴を維持しなければならぬ、教の方に於ては法華經の秀でたる所以を明かにしなければならぬ、唯だ佛教々々ではいかぬ、佛教の中には方便もあり眞實もあり、洵に淺いやうな意味もある、それをゴツチャにして何もかも同じ物ぢやではないかぬこの秩序を立てるといふ事を主張するが爲めに、一つは北條の專横なる所に打つかることになる、天皇を最高の尊嚴として戴かんならぬといふのに、北條幕府が天皇を流し者にしたりますから、日蓮の主張は是れに打つかるのである、法華經を第一として尊敬しなければならぬといふのに、法華經は千中無一であるとか、教外別傳であるとか言つて法華經を貶して居る宗派があるから、それに打つかるのである。日蓮が悪いのではない、打つかるやうな間違つた事をして國體に違反して鎌倉幕府を聞いて居る北條が悪い、法華經第一と言ふ日蓮が悪いのではない、その第一の法華經を貶すやうな意味で宗旨を立て、居る出來損ひが悪いのである。それにも拘らず日蓮を流した、この流したといふのは何を流したのであるか、日蓮が身に泥棒をした譯でもなければ姦通をした譯でもない、日蓮がこの正義を主張する事を罪して流したのである。それを赦すといふに就てはその正義を迎へなければならぬぢやないか、一旦は正義を罪して於て、それを赦して戻つて來たら「日蓮に御馳走食はして置け」……それで濟むといふことは無いぢやないか。日蓮の主張を罪したものならば、日蓮を赦す時その主張を迎へて來なければならぬ、身體だけを赦してその主張を迎へないといふのは不都合ぢやといふので、鎌倉殿中に於て日蓮が

叫んだ。主張を罪して置きながらその主張を迎へないで、唯だ御馳走食はして誤魔化すといふのは不都合ちやと言つて、日蓮聖人が御馳走を食ひながら大いに氣焰を揚げられた譯である、實に面白い所である。さうして如何にも北條の仕方は理由無き事である、流したのも法に間違つて居るし、許したのも許し方が間違つて居るといふ事を盛に論ぜられた譯である。それから金吾頼綱が尋ねるには、あなたは蒙古が我國を襲ひ來るといふ事を屢々仰しやるが、それは一體何時來ますかと尋ねたから、それに對して答へられて、經文には何年何月に來るといふやうな年月は出て居らぬけれども、今日蓮が諸天善神の御様子を伺つて見ると、諸天善神は日本の今日の有様を非常に憎んでお睨みなさつて居るから、必ずや今年には蒙古が襲來するに違ひないと斷言せられた。果せる哉その文永十一年の秋に至つて、第一の文永の役といふものが起つたのである、これは歴史に於て洵に明白な事で、日蓮聖人の豫言は實に『安國論』の中ばかりではない、この時も鎌倉殿中に於て明かに之れを豫言せられたのである。

國恩を報せんが爲めに三度までは諫曉すべし、用ひすば山林に身を隠さんと思ひし也。又上古の本文にも三度の諫め用ひすば去れといふ、本文に委せて且らく山中に罷り入りぬ。(續明遺文錄)

この三度の諫めといふのは、最初文應元年に『安國論』を時頼に捧呈せられたのが第一の諫曉である第二は文永八年九月十二日、『昨日御書』をお認めになつて宿屋の入道を以つて北條に提出せられたのが第二の諫曉である、第三は今申した文永十一年二月に佐渡から歸られて、その四月八日殿中に於て今

申す通りの言葉を以つて直接諫められたのが第三回である。けれども北條は唯だ聞き放しにして、日蓮聖人の申す事を用ひない、これ以上日蓮聖人が強いてやるならば、北條を倒して終はんければならぬ。北條は國體を回復する所の考へが無い、各宗の誤謬を正す所の考へが無い、國の上に、法の上に、正義を行ふ考へが無いのであるから、是れ以上進むとなれば北條を打倒さなければならぬ。併ながら出家沙門の身としては、軍を起して北條を倒すといふことは出来ない。恰度考へて見れば伯夷叔齊が、周の武王の馬をたゞいて諫めて、用ひられざるが故に西山の蕨を食つて死んだ、あれと同じ態度に出るが宜からうといふので、そこで三度諫めて用ひすば去れといふ古の道に従つて身延の山にお入りになつたのである。この日蓮聖人の大事な行動、身延入山といふ大きな事柄が、お經の中から出ずして、古の道と稱して伯夷叔齊が武王を諫めたその事蹟に基いて行動をせられたといふことは、これは餘程注意すべき問題である。日蓮聖人の行動が唯だお經の中からのみ出ないで、この大事が伯夷叔齊の行動に關係を有つて居る、これは日本の歴史をお調べになると判るが、水戸の光圀卿は十八歳の時に司馬遷の書いた伯夷叔齊の傳を讀んで感奮して、それから『大日本史』を作つて、それが本になつて明治維新の宏業が出来今日のような王政に復古したのである。日本の國に取つては伯夷叔齊といふ者は非常な關係がある。支那でも伯夷叔齊の問題は、孔子も判決に苦んで孔子は周を尊んで居るが故に伯夷叔齊の問題には明答を與へて居ない、孟子も明答を與へない、却つて周の武王を褒めたやうな事になつて居る、それが司馬

遷の『史記』に於てはハツキリ伯夷叔齊といふ者はえらい者で、周の武王が間違ひであるといふ意味になつて居る。光園卿の書かれた物を見ると、「武王篡奪の跡免れ難し」と言つて、周の武王が殷の紂王を滅したのは、臣を以つて君を討つ、篡奪の罪を免がれないといふ事を明言して居る。日蓮聖人はズツと早く北條が篡奪の罪を犯さんとして居るといふことを見抜いて、伯夷叔齊に倣つてこの諫言をせられた光園卿は後にそれに倣つてやはり西山公と稱して、伯夷叔齊を慕はれた、今でも小石川の砲兵工廠の中に後樂園といふ水戸公の以前の邸の跡がありすが、その中に懷徳館といふ修養の話をなさつた建物があつた、そこには伯夷叔齊の二人の木像が今でも祀つてある。昔から日本の國體擁護の事に就て議論を吐いた人は、皆この伯夷叔齊の問題に感奮して意見を述べて居る、伯夷叔齊の事に感激しないやうな者に疎な者は居らぬ。その伯夷叔齊に感激して、一番をらい事をやつて居るのは日蓮聖人である、三度諫めて用ひられざれば、去れとは古の道なり、我れこれに倣ふといふので身延に入つた、これは餘程面白い事である。私はこの點に就いて今申したやうな事柄の關係を深く考へて居る、尙ほこの點に就いては研究を積み、且つその精神を發揚する必要があると思ふ、その爲めにこの文を抽出したのであります。



第四章

一、法華經ノ經旨ニ基テ總ジテ曼荼羅ヲ釋ス

此ノ曼荼羅惣雖レ亘ニ二所三會之說相ニ

この段は前の圖顯し給ふた寶塔大曼荼羅(御本尊)を「此曼荼羅」と仰せられるのであるが、その曼荼羅法華經の第十一寶塔品を説き給ふに及んで、大寶塔を中心主體として一切の諸尊の尊形が現はれたので即ち文殊、彌勒、舍利弗、目連、梵天、帝釋、阿楡羅、轉輪王等の天人八部は、法華經最初の序品説法の會座から已に列して居た方々である。普賢、觀音、藥王、藥上等の方々は法華經廿八品の後半から最後勸發品を説き給ふ間に來會された方々である、故に完全な十界の曼荼羅とは「二所三會の説相に亘る」として、法華經の全體にまたがつて現はれて來たのである。云ひ替へるならば法華經一部八卷廿八品を説き揃へられて始めて完全なる大曼荼羅が示現されるのである。今御開山が二所三會の説相に亘る、と仰しやるのはその意味を言はれるのである。「二所三會」とは如來が法華經廿八品を二ヶ所に於て三回の會座に説き現はされたが故に云ふので、其の所と會座になぞらへて法華經の代名詞に古來之の言葉を用ひられて居る、されば「二所三會の説」と云へば法華經の事である。

二所	靈山會	法華經の第一ヨリ第十マデ	三會座
	虛空會	第十一ヨリ第廿ニマデ	
	靈山會	同	
	靈山會	同	第廿三ヨリ第廿八マデ

の如く法華經は靈山會と虛空會の二ヶ所に於て説かれたものとなつて居る。その中靈山會で前後二回、虛空會で一回、都合三回の會座である。

二、法華經ノ經旨ニ基イテ別シテ曼荼羅ヲ釋ス

別、專顯虛空一會、儀式

上に於ては曼荼羅は總じて法華經一部八卷廿八品の二所三會に亘ることを説かれたのであるが、今は別して二所の中では法華經の第十一寶塔品ヨリ第廿二囑累品までの虛空會一座の説相なる旨を述べるのである。前段でも述べた如く見寶塔品第十一に於て大曼荼羅は如來の在ます寶塔を中心として顯現され法華本門の第十五涌出品に來つて白髮久遠の本化の佛弟子、上行安立行等の四大菩薩が現はれ、第十六壽量品に來て釋迦如來は、本化白髮の四人の老弟子を前に、我れは三十にして成佛したる歴史上有限の如來ではなくして、今この老弟子が證明して居る如く、久遠無始の古佛であつたのである、汝等疑念を

去つて仰いで信受すべし、と宣示し給ひ我れ即久遠の本佛なりと、即ち内秘し給ふ處を開示せられた。さうして神力品囑累品に至つて、この法を末代に傳弘することを勸發し給ふて虛空一會は終つて居るのである、故に別して云ふならば曼荼羅とは虛空一會の儀式を寫したものである。之れを日蓮聖人は「法師寶塔に事起り涌出、壽量に事顯れ、神力、囑累に事竟る」と言はれた。されば御開山も御同様にこれをお仰やるのである。今如來が末代の爲に傳弘せよと付囑を宣べ給ふ寶塔品第十一の「此ノ妙法華經」囑累品第二十二の「此ノ悟リ」とあるお言葉は、總じて云へば二所三會の説相に示されたる如來の悟りを顯したものであり、別して云へば虛空一會に限られることとなる、今はその意を言はれるのである。

三、法華經ノ經旨ニ基イテ寶塔ヲ釋ス

凡寶塔者妙法所在之宮殿諸佛恒居之心城薩埵來集之住所五輪

本分之全體也

前にも云ふ如く、如來の御力に依つて宇宙萬法を功德化されたものが即ち妙法蓮華經である。所謂法華經の「佛如、是教法ヲ用説シ給フニ衆生聞キ已テ一心ニ修行セバ煩惱ヲ斷除シ得道セン」と言はれる教法をセンジツメテ一丸の法としたものを指すのである。故に我等の如是法觀は必ず如來の意中に存在

する法でなければならぬのであるが、中には教主本佛如来までもこの法に依つて功德化され、法の内容として法に包まれて居るのだ、と考へてゐる者がある、けれ共それは大變な誤りである。斯うした考へ方は偶々妙法が親で佛は其處から生れ出た子であるといふ誤謬を引出す本となるのである。一體如来を離れて妙法が存在すると考へるが根本的誤りである。

なる程佛教には法それ自體が人を救ふ功德なり、力を持つて居るものだ、とも説くが、其の場合には必ず「如来の法」といふ、その「如来の」と云ふことが何時でも條件となつてゐる、「如来の」と云ふことは花は紅なり柳は綠なりと云ふ自然法、無目的法では無いのであるから、其處に最も深く注意をせねばならぬ。

そこで「寶塔」とは前に云ふ通りであるが、更に法華經に依れば教主如来と、如来が説き給ふ法を、「皆是レ眞實ナリ」と證明し給ふ多寶如来との二佛が在す御寶殿であるとなつてゐる。此處で注意を要することは、多寶如来は本佛釋迦如来の分身佛に在すことである。元來佛教には過去、現在、未來と三世に亘つて無數の佛が在すと説かれて居る、けれ共、其處には本佛迹佛の格式が定つて居るので法華經に來つて歴史上有限の釋迦如来が、實は久遠劫來無始の壽命を持つ如来であると御自身開顯し給ふて三世を貫く常住不滅の如来となり給ふた、のみならずこの久遠本佛釋迦如来は、一切衆生の親であり、師匠であり、主であることを明し給ひ、娑婆の一切衆生は「我れ一人のみが能く教ひ護ることを爲す」と

示し給ふた。そこで法華經では時間的に豎に現はれ給ふ三世の諸佛と、更に十方法界に横に空間的に働き給ふ諸佛との中心に壽量本佛釋迦如来は立ち給ふて、我れは久遠の本佛であつて餘の一切の(時間的、一切の佛)佛は我が大慈悲の救ひの手として現はさしめた迹佛なり、と宣言し給ふたのである。依つて之れを日蓮聖人は「壽量品ノ佛ハ例ヘバ天ノ一月、餘ノ諸佛ハ萬水ニ浮ブ影ナリ、コノ壽量品ノ佛ヲ知ラザル諸宗ノ學者ハ不知恩ノ者ナリ、畜生ニ同ジ」と仰せられ又「コノ本佛釋迦如来ヲアナズリ奉ル諸宗ノ輩ハ近クハ自宗ニ迷ヒ、遠クハ法華經ノ壽量品ヲ知ラズ、墮地獄ノ根元ナリ」と、叱咤遊ばすのである。故にお互ひが信じ奉る佛の上には、法華經に來た以上は本佛と迹佛の區別を能く信解してゐないと大聖人からお目玉を頂戴せねばならぬことになるのである、法華經では本佛とは、釋迦如来お一人であつて、根本の佛に在し、その他の佛は幾等在ましても皆この本佛釋迦如来の慈悲心から生れ出た部分の佛、迹の佛である。さればこの根本の釋迦如来を統一本佛と呼び奉るのである。然るに、この本佛迹佛の關係を妙法蓮華經といふ法だと考へ壽量品を説き給ふた「我レ佛ヲ得テヨリ」と仰せられるマガウカタナキ本佛釋迦如来までもも迹佛なりとして終ふのである。(此の結果は日蓮本佛論なぞが出)之れこそ大變な間違で本心を失つた狂子である——と云はねばなるまい「妙法所在之宮殿」とは寶塔は妙法と云ふ法の安置されてある宮居である、といふ意であるが、一體法と佛とは結局云ふならば二にして一、然かも一にして二の關係となつて居るものであるから離すことの出来ないものである、で何處までも宗教である

から佛様に向つて信仰を捧げるのが正しいのである、佛様は「毎自作、是念」と四六時中迷ひの衆生の上、に御心を惱まし給ふて在すのである。中には妙法を信受し奉れば諸天諸佛が御守護下さる、と法華經に有るから佛よりも何よりも妙法が一番有難いのだ、と云ふ人があるけれど、それは本佛述佛の關係を知らざる人で、この諸天諸佛とは本佛釋迦如來の手となり、足となつて働き給ふ家來の佛、分身の佛様方を指すのである。

それは本佛と、教法を推護し給はんが爲めの所以からである。そこで今こゝに「寶塔者妙法所在之宮殿」とお仰やる妙法とは、如來の悟り給ふた内容を表として妙法所在と云はれたまでで、妙法本佛論者のやうなお考へではないのである。「諸佛恒居之心城薩埵來集之住所」今云ふ所のこの諸佛とは勿論三世十方に亘る一切の諸佛を指すのであるが、恒居之心城とあるから、それ等の佛様達が常に御住ひにならる寶塔は心の城であると云はれるのである。薩埵とは委しくは菩提薩埵と云ふ、菩薩の事である、三世十方に出て働き給ふ諸佛の菩薩とはお弟子である、菩薩とは「上ニ菩提ヲ求メ下衆生ヲ化ス」といふ人達に名けた名であつて、元來化他そのものを以つて直ちに自行とする佛者である。之れ等の菩薩方はお師匠様である三世十方の佛様達が、本佛を中心としてお集りになつて御座るから、やはり本佛のお弟子方と共に本佛述佛を中心として、寶塔の中にお集りになるのである、依て御開山は來集の住所とお仰やるのである。「五輪本分之全體」といふ「五輪」とは、天地宇宙の構成要素を五ツの方面から眺めていふので、即ち地、水、火、風、空の五ツから天地宇宙は出來て居るといふ、「本分」とは「眞實根本の姿」といふことで「全體」とは「缺けた所のない完全なる姿」である、との意である。要するにこの一段は、寶塔は總じて云ふならば宇宙三千の諸法を佛力に依つて功德化されたる妙法を本佛如來と共に安置する所、別しては三世十方の分身の諸佛並に菩薩の常恒に住み給ふ本城であると言はれるのである。

之れを古來吾宗に於ては「事體理德」と言つて、本佛釋迦如來を事體と指し、十界の歴然たる姿が本佛の大慈悲心に依つて組織づけられ宗教化された處を事體(如來)中の理德と示されてゐるのである。故に何時でも「十界」と云ふ場合には一往中間的の因果律に因つて互具を論じ、再往三世を貫く因果の上に救主本佛釋迦如來の因果と、一往中間的因果とは結局すれば同一にして本質的には絶對的因果であると結論するのである。されば今妙法が如來の理德としての内容であるといふのは、この絶對的立場からであつて、この法佛の上に事體理德といふ見識は獨り我が宗門の教學上に於ける一大特色とされて居るのである。

四、寶塔品ノ説相ヲ明ス

多寶者乘此塔ニ垂ニ證明ニ釋尊者召ニ分身ニ開ニ塔戸ニ竝ニ佛塔中ニ
唱ニ付囑有在ニ舉ニ六難九易ニ求ニ末法導師ニ

この文は先の寶塔大曼荼羅は別して法華經中虛空會の儀式に據ることを説かれたのであるが、今は更に別中の別とも言ふべき寶塔品第十一のみの説相を述べられるのである。

抑も虛空會上に多寶如來の寶塔が現はれるについては二ツの意味があるのである、その一つは前來釋迦如來が説き來たられ、今正に説かれつゝある爾前經並に法華經の迹門等は、實を言へば一切衆生をして法華本門の機能たらしめる前提として爲された手段である、故に多寶佛は如何なる場合でも釋迦如來の所説を證明する役目を以つて終始なされる佛であるから、釋迦如來の眞實心から出でたる方便なるが故に、之れを「皆是眞實」と證明なさるのである。これを承前の寶塔といふ。第二は之れから説き給ふ釋迦如來の本門段は、久遠の本佛を光顯し給ふのみならず、一切衆生は未だ迷中に有ると雖も本來久遠本具の佛性を秘藏せる者なることを説示し給ふ場面なれば最も重大事なり、故に之れを「皆是眞實」と證明せられんが爲である。因つて之れを起後の寶塔といふ。いま御開山の御本意はこの起後の寶塔を述べ給ふが御本意である。そこで寶塔品の説相は、釋迦如來が妙法華經を説いて御座ると其處へ證明佛多寶如來が寶塔に乗つて出座し給ひ、一會の大衆に向つて(大衆とは釋迦如來以外の)「釋迦牟尼世尊の所説は皆是れ眞實なり」と證明の言を發せられる、大衆は驚いて釋迦如來にその因縁を問ひ奉り多寶如來を禮拜せん事を願ふ、時に釋迦如來は十方世界の分身佛を集め寶塔を開き給へば、多寶如來は半座を分かたれて如來を招じ入れ給ふ。依つて釋迦如來は塔中より「我れは遠からずして涅槃に入るであらう、

誰れか後の爲に娑婆世界に出てこの法華經を説き弘むる者は無きか、今正しく其時である、汝等大願を發すべし」と付囑を宣し給ひ、更に弘經者の心得として「六難九易といふ、即ち一例へば須彌山を取つて他國に投げる者あるも未だ難からず、若し惡世の中に出て能く是の法華經を説かん、是れ則ち難しとす」と、九ツの大難事を擧げて、然も猶それ等を易しとして更に法華經弘通を六通りの方面から困難なりと説かれ、末法弘教の導師の覺悟を促がさる、之れが寶塔品の説相の大略である。

五、提婆品ノ説相ヲ明ス

顯ニ提婆龍女之得益一奏ニ一乘妙法之流通一

前文に於ては惡世末法に妙法華經を傳弘すべきを勸發し給ふたが故に、此處では提婆品の説相に因つて法華經を信受し傳弘する人は必ず成佛決定の旨を、二個の事實に照して明かにさるのである。現在一身に五逆罪を犯した提婆達多は一度はその報として地獄に墮ちたけれ共過去を尋ねれば、昔お釋迦様が檀王と云ふ國王と生れて法を求められた時、提婆達多は王の爲に法華經を説いて教化利導した事がある其の過去の善根に引かれて今一端は地獄に墮ちるけれども必ず、大地に頭いて倒れた者は大地に依つて起きると同様、法華經に依つて救はれ、やがては罪障消滅して天王如來といふ佛になられる事を明す

今一ツは僅かに年八歳の畜身龍女が、文殊師利菩薩の説かる、法華經を信受し奉つて、成佛の果報を得南方の世界を指して弘法の旅に登るのである。之れは事實を示して未來の流布を奨め給ふのである。「得益」とは功德果報のこと、「流通」とは首尾を一貫して居ることを云ふ。

六、勸持品ノ説相ヲ述ブ

迹化ノ諸聖求ニテ弘經ヲ自述ニ惡世之方軌

この品に於ては、後來惡世に妙法華經を傳弘することを發誓する迹化の菩薩が四種類擧つてゐる。「迹化」とは「本化」に對して云ふので、佛と弟子との上に用ひられる言葉である。即ち先きにもいふ如く「本佛と迹佛、本化の菩薩と迹化の菩薩」といふ之れである。「迹化諸聖」とは中間的の弟子、即ちそれより後の弟子菩薩、といふ意味である。四種とは一ツには菩薩、二ツには阿羅漢、三ツには聲聞、四ツには比丘、比丘尼等である。(以上四種の名は修行に依つて) 之等の迹化大徳の尊者達が、如來御涅槃(涅槃とはの爲に身を除す)の後、如何なる惡世でありませうとも死身弘法の信念で必ず法華經を弘むべきことを佛前に誓願するのである。「方軌」とは惡世末法の弘經者が守るべき規律規則と云ふことである。

七、安樂行品ノ説相ヲ述ブ

文殊者開三章問一請ニ方軌ニ世尊者説ニ四法ニ勸ニ始行

この段は法華經の第十四安樂行品の大意を述べられたのであるが、上の勸持品に於て惡世の弘經を自ら奉行せんと發願する者があつたけれ共、中には末世の惡人を濟度することは我等の能く堪へられる所に非ず、と退く人々も多數ある故に、一座の長老文殊菩薩は其の進退に躊躇する人々の爲に、若し安樂行があれば説示し給へど、進退兩者を代表して如來に明答を請ひ奉る。今それを「開三章問」と云はれるのである、章とは第一には如何やうにすべき、第二には、第三にはと章を分けて問を云ふ、開くとは問ひの意味を區分けることを云ふ。「方軌」とは前にあるに同じ。其處で「四法」と言つて一ツ身と二ツ口と、三ツ意の三業に深く如來の教を守つて堅く身心の行ひを正し、誓願安樂と言つて他の爲に此經を説かねばならないと一生懸命に勵むが一ツ。以上即ち身、口、意、誓願の四種の安樂行を修すべきことを教へ給ふ。「始行」とは未だ信仰の淺い人、佛法初門の人々に對して佛道の修行に志すべきことを勧められることを云ふ、之れが安樂行品の大略である。

八、以上ノ迹門段ヲ結ス

是則、迹門流通ノ之説相也

この一句は迹門の十四品を結ばれた文である。今この誦誦章では第十一より十四まで四品しか擧げられてないけれ共、それは寶塔大曼茶羅を虚空一會の上に説かれる關係から直接關係の四を擧げて後はこの四品に込めて迹門全體の意を結ばれたのである。「流通」とは以上全十四品の中に説かれて居る事柄の首尾を一貫してゐることであるとの意である。(大續)

本多日生上人祝下の三回忌を迎えて 寶前にぬかづき

追悼涙歎二首をさゝぐ

彌重萬佐子

これをさきり これをさるほど いやゝかたぐ

すめら御國の 魂の君

すべしあらば みだるゝこゝろの 荒浪を

むちうちたまへ 神さりぬとも

日生上人三週忌法要並に

講演會の記

日蓮聖人の六百五十遠忌といふ意義深き歳に、我等の現生涯に於けるこよなき正法の恩師にてましました聖應院日生上人は渣焉として化を他界に遷されたのであつた。恩師の長逝の餘りに早かりし事を我等は歎く。然し恩師は無上なる教化の賜と、いとも大いなる職責とを我等に残して行かれたのである。我等を奮起一番厥然として法國の前に殉へしめんが爲に……。

三月十五日御逮夜に相當り、午後三時恩師の薫陶を忝ふしたる團員上下は、恩師の靈骨を埋めたる品川妙國寺の墓前に參詣し、小西日喜導師の下に讀經唱題以て忝しく法味を回向し奉つた。終つて本部會館に來れば、法要に先立ち、遺品展覽會は樓上に開かれあり、御佛間をば上人の御居間として、上人親筆の御曼茶羅及び書軸を掛け參らせ、其の傍らに平生上人の御用ひ遊ばされし紫衣袈裟袈念珠等又かの我等が眼にいとも親しくなつかしき布教服及び修多

羅等を衣桁に掛け、又御常用の御机には、恩賜の天盃三ツ重ねと文部省表彰の桐花御紋章附硯箱、又御愛用の筆硯等を飾り、又明治三十八年日露戰役當時の夏秋、令妹重野女史の嫁せられし沼部彌太郎氏出征中の留守宅にて執筆せられし法華經講義と其の時の御机とを嚴り、續く洋室には三方の壁に十數葉の恩師の御一生を偲ぶお寫眞を掛け、又卓上には、恩師が御臨終の時に至る迄身に纏ひ給ひし御召物、綿入、絆纏、メリヤスのシャツ等を安置し、或は又恩師が四箇格言事件當時より用ひられ來りし歴史深き金襴の御袈裟等を衣桁にかけ、又御使用の書棚の内には、落款印肉筆墨等、其の上には恩師上人が病篤き御身なるに、名古屋に於て昭和五年秋十一月「法統擁護の一大事」を絶叫し給ひしころの御生前最後のお寫眞を立て參らせ、ひとしく參詣者の胸を打つ品々がいと多く列べられて居たのであつた。

午後六時 恩師御生前の知友名士を來賓として、遺族團員二百餘名は満堂座席も無きまで講堂に參集して、小西日喜導師の下に鈴木權大僧正、本妙法華宗代表釋眞誓師等數多僧員參列法要を嚴修し奉る、上

田理事長及び磯部常任理事は御寶前に左記言上文を捧讀し、夫より唱題裡に會衆燒香し、肅々時餘にして漸く之を終る。

言 上 文

是レ時昭和八年三月十五日、泰シク一會ノ淨來ト共ニ、謹シテ大法ノ恩師、聖應院日生上人三週忌法要ノ式典ヲ奉ル。

夫レオモンミルニ、恩師上人遙カニ化テ他界ニ遷シ給ヒテヨリ、俄然我國ノ内外ハ天歩艱難甚ダ多事ヲ致シ、ウタタ學國民人ノ一大覺醒ヲ切要スルノ時トハナシヌ。

此時ニ當リテ、我が統一國ハ則チ當ニ恩師ノ遺命ヲ奉ジ、ヒタスラ法ト國トノ爲ニ盡サント、同志相勵ミ、相誠メ、以テ漸ク布教傳道ノ具體的進歩トシテ統一會館ノ完成ヲ見ルニ至ルヤ、宛カモ好シ、紀元建國ノ聖節ニハ開堂ノ式典ヲ奉行シ、今此ノ度ハ謹シテ三週忌法要ヲ嚴修シ、以テ恩師日生上人ノ追善菩提、佛果増進ニ資シ奉ル誠ニ此式典ト、此道場トハ、互ニ深ク其ノ旨ヲ得タルモノカ、蓋シ恩師御晚年ノ遺業ニ端ヲ發シ、遺弟團員ノ力ニ依ツテ成レリシ此ノ道場ハ、是レ正シク恩師ノ魂魂ヲ留メ給ヒシ處、今此ノ處ニ於テ此ノ法要ヲ營ミ奉リ、以テ恩師御生前ノ德風ト、教誡トヲ憶ビ、ソノ感應御加被ヲ仰キ奉リ、而モ況ンヤ國家非常ノ時局ニ當リ、恩師ノ精神魂魄ヲ分クニ傳ヘ受ケタル我等教化ノ弟子團員ハ、遍ク法統愛護、知法思國、濟世利民ノ大誓願、大覺悟ヲ因メムト欲ス、誠ニ是レ大善事大佛事ニ非ズヤ。

仰キ願フハ、佛祖三寶尊重ニ護法護國ノ諸天善神等、感應道交、哀懇納受、以テ生等ガ現當ノ所願ヲ悉地成弁ナサシメ給ヘ。

昭和八年三月十五日

財團法人統一團理事長 上田辰卿

日蓮聖人云ハク

佛ニ成ル道ハ善知識ニハ過ギズ、我智慧何カセン、只涅槃計リノ智慧ダニモ候ナラバ、善知識大切ナリ、而ルニ善知識ニ値フ事ハ第一ノ難キ事ナリ、然ラバ佛ハ善知識ニ値フ事ナバ、一眼ノ龜ノ浮木ノ穴ニ入り、梵天ヨリ下ス糸ノ大地ノ鏡ノ目ニ入ルニ譬ヘ給ヘリ、然ルニ末代惡世ノ惡知識ハ大地微塵ヨリ多ク、善知識ハ爪上ノ土ヨリモ少ナシ。

ト、吾等宿願深厚ニシテ善知識ニ値ヘリ、而モ予ハ、恩師日生上人ト其體ヲ同フシ、其護ヲ等フシテ双親ノ往復亦尋常ナラズ、然リト雖モ予ハ幼若ヨリ、纏子出テ遠ク去ツテ海上ニ浮ブ、日生上人又復東奔西走、南船北馬、國民教化ニ寧日ナク磨滅マルナシ、互ニ相見ザル茲ニ年アリ。

偶々日生上人管長ノ職ヲ辭サレタルノ年ニ、予モ陸ニ遊ブノ身トナリ、爾來出入漸ク加ヘリ、遂ニ常侍者トシテ機縁愛ニ熟セルハ宛カモ法華經信解品ニ教ユル長者窮子ノ譬喩ヲ如實ニ體驗セルノ感轉ヲ深シ、靜慮セバ其情益々迫リテ、又能ケ口ニ達スル能ハズ。……

觀テ昭和六年春、日生上人日毎ニ其ノ音日ノ雄姿ヲ失シ、所作自ラ滄沈セルノ傾ヲ拜シ、醫師ニ迫ルモ校等其ノ專門々々ノ文化分裂ノ

弊惡ヲ以テ、綜合統一ノ妙味ヲ嘗メザルガ爲メ、速カニ其ノ病源ヲ知ラズシテ遂ニ悔ヲ千載ニ始スニ至ル、世ハ之ヲ運命ト稱シ定命ト云フ、嗚、果シテ然ル乎。

曩ニ 日生上人、予ニ告ゲテ『慮フコト勿レ、陽春四月ニ到レバ勇氣百倍シ、更ニ二十年ノ活躍ヲ期セント』其腕ヲ扼シ差留トシテ天ヲ仰ガル、宛カモ師子ノ一音ノ如シ。而モ今ヤ又其肉聲ニ接スル能ハズ、悲イ哉。『ア、曠野、曠野カ』ノ最後ノ悲音、日ヲ經ルニ隨ツテ徒々新ナリ。予ハ先年悲母ヲ失ヒ、越エテ又恩師在サズ『自ラ性ニ孤露ニシテ復恃怙ナシ』嗚呼傷イ哉。

伏テ惟レバ、日生上人化テ他ニ遷サレテヨリ宗門ノ現狀夫レ如何。宗門ハ醜聞ナルノ觀ヲ痛嘆セズンバアラズ、偉人去ツテ暗影何ゾ悲慘ナル、今始メテ其大ナ知ルモノ漸ク内外ニ加ハル。然リ而シテ悲涙未ダ乾カザルニ早十三週ヲ迎フ、此間吾等教恩ニ浴セル士女ハ善ク上人ノ遺命ヲ奉ジ、千苦萬難漸ク 日生上人一世ノ化導根本聚團タル統一團ヲシテ法人組織ニ改メ、續イテ教果ノ鑽石、宗門ノ一大明星タルノ淨舍トシテ新ニ會館ヲ建設シタルモノ、今日悉ク排ダテ以テ恩師報恩ノ實履ト爲シ、是レ團員一同ノ庶幾スル所ナラン。

謂フ迄モナク當會館ハ、日生上人留魂ノ根本道場ナレバ、克ク佛祖正脈ノ法統ヲ開明シ、我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ、能ク時代對應ノ妙化ヲ敷衍シ、以テ立正安國ノ大義ヲ徹底セシメ、恩師ノ遺命ヲ辱カシメザランコトヲ吾等一同、此際ノ強盛ニ御寶前ニ誓フ所ナリ。吾等微力ナリト雖モ、未ダ世ニ知ラズト雖モ、『養身キテ以テ黃金ヲ捨フル事勿レ、一切ノ草木ハ地ヨリ出生ス、一切ノ佛法モ亦人ニ

ヨリテ弘マルベシ、末代何ゾ法ハ貴ケレドモ人ハ賤シト云ハンヤ』ト立正並ニ天台大師ハ釋サル。貧窮下賤ノ者ト雖モ一致協力セバ、以テ恩師ノ千萬ガ一分モ其芳躅ヲ繼承シ能ハズト云フコトナケン、要ハ其ノ勇猛精進ニアリ、其具體同心ノ實現ニアリ、自信彼此ノ我執ヲ去ツテ抱擁統一ノ大義ニ還ルニアリ。

今ヤ任重クシテ道遠シノ感ナシトセズ、然リト雖モ千里ノ道モ一歩ヨリ始マル、至誠一貫何ゾ貫徹セザラン、師ヲ失ヒ、或ハ友ヲ失ハシモ、又自ラ手ヲ失ヒ、師ヲ失ハシモ、我等ノ命ノ通ハン程ハ職力ヲ排ダテ法國ノ大恩ニ報ゼン、コレ亡キ恩師ヘノ第一ノ給仕奉公ナラザルベキカ。

茲ニ謹デ其教恩ニ浴セル我等、此ノ新會館ニ聚リ至心ニ 御本尊ノ御前ニ於テ、恩師ノ舍利ヲ安置シ聊カ供養ノ儀式ヲ展ベ奉リ、七世ノ教恩、併メテ生々ノ父母、並ニ統一團員親疎有縁等普ク此際リニ法雨ヲ灑ギ、總ジテ法界萬靈同ジク妙因ト成ラン。

南無妙法蓮華經

維時昭和八年三月十五日 日生上人三週忌御遠夜

常侍者 滿 事 敬白

少憩の間に本部婦人部の特製された誠意の籠つた折詰の晚餐を了し、七時半故人を偲ぶ講演會に移る。

先づ最初、恩師の滅後かの親しき、慕はしき、なつかしき恩師の肉聲に接し得べき唯一のかたみとし

て、恩師が大正十五年五月蓄音機に吹き込み給ひし「佛教の信仰」なる御説法を會衆一同うたゝ心耳を澄まして傾聴した。あゝ御説法の口調といひ、經文遺文の讀調といひ唱題の音聲といひ、柔順の慈音はた剛健の韻律、恩師が我等に與へむとするうたへむとする様々の無限のお心が正しく此のお言葉此の音聲に籠つて居る——籠つて居る……

源渺たる靈感消えやらぬ間に、恩師の知友文學博士姉崎正治氏は立つて、別項の如き意味深き講話を致された我等は黙々として轉た感慨深きを覺えざるを得ぬ……

次に政界の重鎮床次竹二郎氏は、明治四十五年の頃、西園寺内閣當時、原内相の下に次官として、神佛耶三教融合の事業を起し、日生上人を始め今夕參列の姉崎博士、佐藤中將、矢野閣下等後援の下に、朝野賛否の聲聳々たる中に、敢然之を發表し我國の宗教界に一種の氣運を起し、外國の思想界よりも讚辭を寄せ來りし事をユーモア裡に追憶せられ、自己を語りつゝ而も、背後にあつて自己を躍らせし最もたちのわるき日生上人に然も功を歸せて喝采裡に降

日生上人の追憶と其將來に對する希望

東京帝國大學教授 姉崎正治

壇せらる。最後に小林一郎氏は、本部主催者側の一員として次號掲出の如き感銘深い胸中を披露されたかくて、十時にも近づきぬれば、種々感激にひたりつゝ、名残つきせぬ幕を閉じた。

此日記念として最初に於て參列者一同へ贈呈せる恩師日生上人が先年國民講座に於て最後に師子吼遊ばされた「佛教の本質と其價值」といふ時代對應の教化資料として最もふさはしい冊子を、各大事に抱いて家路へと連れられた。

當日、大阪立正青年團及び在京秋山乾英師より「上人ノ法勳ヲ思ヒ大覺ヲ祈ル」の電文を寄せられ、又遙かに福島支部、岡山報恩會、津山林顯太郎氏、神戸森岡正男氏、高岡畠山友次郎氏、淡路吉岡正太郎氏等々から懇篤なる追悼の辭や御芳志を寄せられ、更に横濱支部からは石毛、佐藤、高田、和田等の夫人が折詰め調理に態々二日が、りて來援御奉仕された事を厚く感謝して此の記を結ぶ。

(當日姉崎博士の御感想談を左に掲げさせて頂きます)

日生上人がこの世を御去りになつて早や二年になります。今此處で御存生の時の御聲を、器械を通してとありまするが聞いて、その昔を憶つて萬感胸に湧く思がございます。しかし又同時にたい御聲を聞くだけでなく、その聲に籠る上人の信仰、主義、熱情、それらは決してその肉體と共に亡くなつたものでなく、今も尙ほ、否、今後ますます日本國を中心として、世界に擴がるべき命のあるもの、あるべき

善の御命であると思ひます。即ち壽量品の「雖近而不見」の教を痛切に、今たい御聲を聞いたゞけに依つても一層深刻に感ずる次第であります。

今日この席に參上して、追憶として、いろ／＼思出すことを申述べて見たいと思ふこともありまする

が、私は先づ學問の方から見ての接觸、その方からの一二の追憶と、又將來に對する上人の門下の方々に對しての希望を多少申述べることを許して戴きたいと思ひます。

日生上人の御一生のはたらきは種々の方面に涉つて居つたこと、これは私が今一々數へ上げる必要はないと思ひます。しかし要するに日蓮大聖人の御言葉にもある通り、佛法を學するには行學の二つを缺くべからず、所謂行と學とであります。學はそれに依つて人生を知り、物事の理に通ずると共に、思想を整へ纏めて、己を出発點として、世界一切の衆生と共に同じ道に歩む門出であり、又基礎である、そこに所謂思想の問題があります。しかし申す迄もな

く如何に尊い思想でも、たゞ思想としてそれを懐いて居るだけならば、それはたゞ學問である、たゞ所謂思想家である、吾々學究の徒はそれに終る場合が多いのであります。しかし佛法を學ぶ者、佛法を己の命とする者には、それと共に又行がなければならぬ、その思想に基いた生活、その生活に依つて他人を感化し、人と我と、我と人と共々に所謂『皆共成佛道』の道を歩まなければ、その學も證のないことになる、こゝに於て佛法の大意旨は行學の二つを絶つべからずといふことになることは、これは千古の眞理であり格言であります、しかしそれを本當に備へ得て之を實行する人は多くはない。吾々學問の方に従事しますものは、所謂學者書物の蟲になつて、たゞさう考へる、斯ういふことを知つて居るといふことで済す場合が多いのであります。これはまあ暫く學者といふもの、書物の蟲といふもの、病だとして御許を願ひたい。サウ言ふと 私がそ

の方に通込むやうであります……(笑)但しチョツト附加へますが、今御紹介の中に、圖書館を管理して居ると仰しやいました、私は大學の圖書館を管理する者として、書物を成べく多く備へて、どの書物でも讀めるやうに學生、學者に供給するのが義務でありますが、同時に私は始終學生達に言つて居る『書物を十分備へることに盡力はするが、しかし書物に吞まれてしまはないやうにし給へ、殊にこの頃の青年達は讀み過ぎていけない、こなさずに讀む、それだから却て食傷してしまつて思想中毒をやるのだ、能くこなすならば書物を讀むべし、こなし得ないやうなものをむやみに讀むな』といふことを始終言つて居りますが、しかしさう言ひながら吾々學問に従事する者は、どうしてもやはり書物に據り過ぎる、物を知りたがり過ぎる。さうして思想を或る程度まで整へるとそれで満足してしまふ。所謂行がなくなつてしまつて、學が不具な、跛足の學に

なつてしまふのであります。

その反對に、所謂宗教家といふ實行或は傳道に従事する人々を見ますと、恐らくその反對の弊があるのではないかと思ひます。勿論世の中にはいろいろの方がありますから、之をさう概括して申すことは出来ませぬが、學者といふものが多くたゞ學、思想、知識で満足すると恰度反對で、而も偏頗なことと同じで、所謂傳道をする人はたゞ傳道をして、さうして多くの人に説教して歩く。或は場合に依つては、昔ならば寺を建てる、その他の仕事をするとはいふ方が多くなつて、所謂仕事師になる危険が多いと思ひます。寺を一つ建てる、さうするとその境内のこと、その寺を飾ること、さうしてその寺が出来ること、その寺を飾るとか、さういふことに没頭して、稚兒行列をやるとか、場合依るとその如何にも外觀は壯であるやうだが、場合に依るとその爲に却つて實質を失ふ、これも所謂行には違ひありませんが、實行の方に偏する、さうしてその爲に

思想、學問の方に疎くなるといふ弊が同時にあるかと思ひます。殊に徳川時代の佛教は、さういふ種類の形だけの佛教が多かつたその遺傳を享け、傳統を承けた明治時代の佛教には、その病を傳へて居つたと思ひます。その間に出て行學の二つを備へて、進んで今日まで佛法の命脈を維持し、發達して來た方々、所謂名僧知識も明治以來かなりあります、それを今一々こゝで數へませぬ。

斯う考へて見ますれば、本多日生上人は、その行學の二つを兼ねた方であつたといふことは、一々モウ註釋を付けて申上げる必要はないかと思ひます。書物を讀むことに於て、他の多くの僧侶達、のみならず僧侶だけでなく吾々學問に従事して居る者よりも恐らくは多かつた、或は少くとも劣りはしなかつたらうと思ひます。極端に申せばあの『大藏經要義』の著述中は、始終縮刷藏經を一冊か二冊、袋か何かの中に入れて、電車の内でもそれを讀んで居られた

のであります。それだけ一生の間に書物をお讀みに
なつたか、それは數へることが出来ないだらうと思
ひますが、確かに種々の方面に涉つて知識を吸収さ
れて、さうしてそれを思想に陶冶することを努めら
れたのであります。

それに就て一つ私と直接の關係の點を一例として
申し上げます。上人が今の東洋大學の前身、前の哲學
館を卒業されて——まだされないか、されて間もな
くであつたか、例の四箇格言事件で大いに働かれた
それが濟んだ頃、或は濟まない内にも、常にやはり
學問といふ點に注意されて居つた。世間では上人の
ことを、あゝいふ問題で騒ぎ立てる人間といふやう
に思つて居つたらうと思ひます。日蓮門下に關係
のある事件で世間の注意を喚起したことに於ては、
その前、恐らくその十年餘り前、あの本満寺に在る
「富木殿御返事」に關して、重野安釋博士がそれに
基いて龍の口の法難はなかつたことだと言はれた、

ひ文す。

然るにその時、既にその前からであつたでせう
が、學問の上に於て思想を鍛練し整へるといふこと
に骨を折つて居られた。その例の一つは、恰度あの
訴訟事件が濟んで恐らく二年かそこらの時であつた
と思ひます。私がハルトマンの宗教哲學といふ獨逸
の書物を翻譯致しまして出版しました、それから數年
後でありました。その時は私、日生上人にはまだ接
しない、互に知らない仲であります、それから七
八年後になつて初めて御交際をした。さうして色々
な話の時に上人の言はれるには「君の翻譯したアノ
宗教哲學、あれには非常に御恩になつて居る、あれ
に依つて我が日蓮主義を多少とも現代の思想と連絡
を付けて考へることが出来るやうになつた」といふ
ことを言はれて、それから時に依るとあれに就て質
問されたことがある。ところがお恥しいことですが
そのハルトマンの宗教哲學といふ書物は、獨逸の學

それに對して田中智學居士が大いに聞はれた、これ
は恐らく明治二十年代に於ける、少くとも世間の耳
目を聳動した一事件であつたと思ひます。それに依
つてそれだけの結果を得たかどうかといふことは、
これは暫く別です。それに續いて、又それから後約
十年かと思ひますが、日生上人が四箇格言事件を提
げて、これは訴訟を起された、各宗と對論もされた
が、主として訴訟を起された。これを公庭に訴へた
ことの是非得失といふことは、これは批評の餘地が
あらうと思ひますが、兎に角四箇格言を護らうとい
ふその精神の通りであることは確かである。これが
少くとも世間の耳目を聳動した第二の事件であつた
と思ひます。それでそれから世間では、あの事件だけ
に依つて日生といふ名を知つて、あれは所謂什事師
だといふやうに考へた者もあつたらしく考へられま
す。私共はまだその頃書生で、それ程考へなかつた
のですが、さういふ印象を世間に遺したらうと思

者の辨で、簡単に言つていふことを難しく言つて居
る本なんです。そこへもつて来て私が、その頃自分
が出来ない獨逸語を一つやらうといふ熱心があつた
爲に、忠實にその通りに譯しようとした、解らぬや
うに書いてあるのを解らぬように譯しようとしたも
のですから、數年経つて——その時は自分にも多少
解つて居つたんでせうが、數年経つて——一體學者
といふものは、本を書く時、印刷するまでは熱心な
ものですが、出来てしまふと後を覗くのが實は少し
怖いのです(笑)見ずに居りました、今日までもまだ
見ずに居ります。穴が出て來ると怖いのです、ヒヤ
ッとするから、それで見ずに居る、見ない方が無事
なんです(笑)。さうすると日生上人は時に依ると、ア
ノ妙國寺に行つた時に、その本を出して來て、本に
なんだかウチャ／＼書入れてあります、それを出し
て來て「こゝはどうだ」といつて質問される。サア
翻譯した本人が却つて御存知ない(笑)「サアなんだ

つたか、一體これは私の譯文も解らぬが——恐らく原文も解らぬのだらうが、原文と較べ合せないと本當のことは解らぬ」といふやうなことでお茶を濁したことがある。恐らくアノ書物を熟讀し、飯味し、さうしてその解らぬ原語を解らぬ日本語に譯したその解らぬ書物の中に、何かを掴へて、自分の頭には解つて居られたのは、恐らく日生上人天下第一であらうと思ふ。他にあつたかも知れませぬが、まださういふ人に遇はない。

それと申すのは、内容から言ふと、ハルトマンの思想はヘーゲルを主として居ります。このヘーゲルの哲學が不思議によほど天台の教觀と克く似て居るのであります。だから日生上人に取つても、まんだら他人のものを讀む心地でなく、洋の東西非常に隔つた所ではあるが、期せずして同じやうな傾向の思想が出て居つた、それを掴へられたから解りよかつたのでせうけれども、とにかく解りにくく書いた書

は珍紛漢でなんのことも解らぬといふので、だんだん人が遠ざかつてしまふ。殊に青年等はさういふことを一々ホヂツテ居る忍耐力がないから、チョット聞いて解らぬとモウ去つてしまふ。それらの點を日生上人は、恐らく自分自身の経験もあつたからうと思ひます。佛教の術語をその儘やられては自分にも解りにくいといふ経験からして、佛教の教養を傳統に基いて忠實に一方勉強し、修學するが、同時にそれをモウ一つ鍛へ上げて、所謂一系の思想として——いつも言つて居られた、日蓮主義は統一主義だといふことを始終言はれた、さうしてその名がこの圖にも命けられた如く、統一思想だといふ、その統一といふことは、いろ／＼なものをたゞ合せるといふ意味でないことは勿論である、一貫した主義、信仰が中心にあつて、さうしてそれに枝葉が附いてもその枝葉を擧めて行く力のあるものだといふ御主張であつた。確に佛教はそれであり、殊に天台の

物を、解りにくく翻譯したものを一生懸命に讀んでさうしてそれを悟得された、それ一つでもその熱心を知るに足ると思ひます。それと申すのは、要するにそれまで佛學を師匠に就ておやりになつたし、また哲學館でも所謂近代の哲學とか何かをおやりになつたのでありますが、とにかく思想、學問——學問は、たゞものを知るのではない、それを一系の思想に鍛へ上げる、勿論大聖人の思想、信仰、教義に基くのでありますが、基いたところでたゞそれをその儘習つて居るのでは、所謂鸚鵡返しになる。如何に尊い法であつても、その使ふ言葉、言現し方が昔の儘ならば、今の人には珍紛漢である。如何に有難い經でも、それをたゞ經として讀んで居るだけならば、多くの所謂門外の人には珍紛漢になつてしまふ。佛敎にはその弊が随分昔からあつて、何か經の文句を引いて解らぬことをベラ／＼と吳音で言ふと尊いやうに。佛教者自身は考へて居るが、聞いて居る者に

教觀から出た日蓮聖人の事觀の宗教はそこにある。しかしながらそれにしても、それを言現はす言現し方が鎌倉時代の言葉その儘では、今の人に通じないそこで所謂日生上人の學問に於ては、一つは自分自身佛敎の正統を貫いて來たところの、天台、傳敎を経て日蓮大聖人に至つたその思想を、己の胸中に收めて、それに統一の組織を與へ、自分の思想をそれに依つて鍛練すると共に、その思想、教理、信仰を如何にして一般の現代の人々の思想に連絡を付けそれに喰入るやうに出来るかといふ點に苦心をされたのであらうと思ひます。上人の著書、講演それらには總てその苦心が現れて居ると思ひます、即ちさういふやうにして日生上人の所謂學問は、古典傳來の尊い思想、所謂久遠以來の思想を把住して、さうしてそれを所謂統一思想として、我が魂、我が命として、自分の血の通つた思想として鍛へ上げて、それを現代の人々、それには種々の教養の差があり、

或は學派の差があつても、それらの人にも通ずるやうに、如何にすれば通ずるやうになるかといふところに苦心をされたのだと思ひます。それに依つて一生の間に澤山な著述もなされ、講演その他講義もなされたので、その効果はいろいろの方面に現れて居ります。

そのことを考へますれば、明治以後の佛敎家の中に於て、學問といつて、或は古典の學問、或は註釋のことに通じたといふやうな人に於ては、若くは昔からのいろ／＼の敎理の論争なんかに通じた人に於ては、日生上人以上の人も他にもあつたであらうし、今日もあらうと思ひます。しかしそれらを總て纏めて、所謂統一的見地を以て思想を鍛練しようとし、又した人としては、日生上人に越える人は、私はなすといふは申しませぬが、餘り多くはなからうと思ひます。

しかるに惜しいかな、その統一、纏め、組織がまあの精神を繼いで、さうして同様の苦心と敎養とを経て行く人が必ず出て来る、さうしてその志を繼がれること、思ひます。これは學の方であります。

行の方に於ては、日生上人が所謂熱烈な實際の運動家であり、又殊にその體力は強く、精力絶倫で、南船北馬、席温まるに暇ないやうに布教、傳道、講演にお歩きになつた。それは實に明治以後の佛敎に於て、これも亦有數の例であらうと思ひます。これを統計的に取つて、諸方に於て講演をされ、説教をされ、講學をされた、その前後の度數、聽衆など、の統計でも取つて見ましたならば、明治以後の佛敎家に於てあれだけの人は、ないとは思ひます。それについては、この派の始祖の日什上人が、老年になつてから改宗をなされて、さうして確か八十歳であつたかと思ひますが、その頃まで非常な活動をされた、その面影を現代に吾々は見ることが出來たやうに思ひ

だ十分に出來ない間に御遷化になつた。天、上人にモウ十年の壽を與へられたならば、今までのあれらをモットお纏めになることが出來たやうと思ふのであります。が、御遷化になる時までの状態に於ては、その努力を續け、謂はゞその材料を集め、作りつゝ居られた。あの『大藏經要義』の如きは實に善く出來ては居りますが、まだ組立であります。それを本當に陶冶し、統一するところには至つて居なかつたのではないか。勿論極く一般の人に示す爲の今日もお施ちになつて居るあゝいふ種類のものは出來て居ります。併しこゝに日蓮主義に基いた佛敎思想を、現代的に、現代の人に通ずるやうに堂々と、しつかり、大きな組織を與へられるといふところにはまだ至つて居なかつた。恐らく上人の胸中にはだん／＼それが熟しつゝあつたこと、思ひますが、それを遺さずに御遷化になつた、これは實に遺憾なことで存じます。しかし上人の門下、その他に於て、

ます。この點に於て吾々日生上人を敬慕し、追憶し又非常な熱心なる活動家を喪つたことを、佛法の爲にも國の爲にも哀みます。

それに關して私の感想としては、この點に於ても上人の御考は、それだけあちらにこちらに總て種を播いて、さうしてそれをズツと纏めて、遂に一つの纏めを付けるといふことを考へられて居られたらうと思ひます。必ずしもそれが三秘として言現はされて居る戒壇といふ理想にまでは至らないにしてもその豫備とも言ふべき、たゞ人に教へ、人を感動さす、さうしてどれだけかの隨喜者が出來るといふだけのことで満足されるのでない、それらを纏めて、そこに一つの、必ずしも今日言ふ意味の宗旨、教團といふものを作るといふことではなくとも、それらの四方に播かれた種が段々に成長する、それを纏めて、さうしてその間の連絡を付けて行くならば、そこに所謂戒壇建立の豫備の一步を進めるものである

といふ意味に於ける、それらの結果を纏めて見たいといふお考はあつたことだらうと私は想像致します。

殊に日生上人の晩年は、實際お目に掛る機会が少なかつた。私共の一緒に組織して居ります會にも出席を願はうと思つても、なか／＼こちらに御在京の機会が少く、居られてもチョット来てまた外へ行かれるので、晩年には實にお目に掛る機会が少なかつたので、殊に私はこの數年來、戒壇の問題に關して考へ、且つ疑問を持ちいろ／＼して、學問の方では山川智應君などに教を乞ふて居りますが、實際問題として日生上人のお考をも聞き、共々研究もして見たかつたのであります。その機会を極く僅か——殆ど得ずに、今日幽明相隔るやうになつたのであります。

そこで今申したことは私の想像ですが、どうしてもあれだけの仕事をし、傳道の活動をなされた以上の中心組織を作りつゝ進む、一方擴げると共に、一方基を築き上げる、固めるといふことが必要でないかと思ふのであります。さう申すと日生上人を少し批評するやうになります。私の率直なる感じを申さば、日生上人の一生の活動に、あれだけの活動をなされたに比しては、その割合に後に遺される組織、所謂纏りの方に於ては、まだそれだけに比例したぐけの効果が現はれない間に御遷化になつた、その點が殊に遺憾に考へられるのであります。それが缺點であると申すのではありませぬが、一面擴げると共に、一面纏めるといふ方が相比例しなかつたといふ憾みがあるのであります。

この問題は宗教運動のつまり方法、組織の問題になります。これに關して私は、明治以後の佛教が、昔のやうな超世間的のものでなく、世間的になつて所謂社會的になつて行つたことは非常に喜びます、これは勿論善いことでありますが、同時にしかし又

それに對してどれだけの纏めを付けるといふお考へはあつたであらう、その纏めの付け方が如何なる方法で、如何なる形になるかといふこと、それも或はお考があつたであらうかと思ひますけれども、それは私が想像し得る限りでない。兎に角あれだけの傳道、布教をなされた人は、明治以後の佛教に例は少ない。しかるにその結果を十分にお纏めにならずにこの世をお去りになつた、この點頗る遺憾に感じます。

その點に關して、上人の門下の今後の統一團その他の諸君に對しての私の希望は、宗教傳道に於ては所謂行を營む上に於て、廣く、旺んに活動するといふことが、一面勿論大切である。しかし同時にどれだけかづゝの纏りを付けて、基礎を鞏固にして行くといふことが同時に必要でないか。必ずしもそれはお寺を建てるとか、會を作るとかいふことのみではなからうと思ひますが、何かしらさういふ形の具體

宗教運動には、世俗に染まない、モウ一つ超然たる脫俗的の方面があつて、さうしてその源からして始終世間に對する光を與へ、清淨の空氣を與へるといふやうなものがある必要がありはしないか、現在の世界全體の宗教運動の中に於ても、それらの點に付て吾々に材料を與へるものが多々あるやうに思ひます。たゞ社會的に、世間的にいつて、さうして世に入つて行つたならば宜いか、さうすると一時効果は擧るやうであるが、しかし永續しないといふ憂がある、一面少し世間に遠ざかつたやうな感じがあつても、世間離れをしたやうなものがあつても、一つの信仰の團結が、場合に依つては世間と暫く離れたやうであつても、固い、叩いても碎けない纏りがあつて、それを中心として、所謂根據として、さうして必要ならばいつ何時でも、何處へでも斬つて出るといふ、その本據といふものが宗教運動には必要ではないか。恐らく今日の世界の宗教に於て、その本據

を確に持つて居るものはカトリック教會であります
 佛敎にも本来これはあつたのであります、しかし段々それが衰へて居る。私の考では、日蓮聖人の最後八年間に於ける身延の御生活は即ちそれであつたと思ひます。大聖人の身延隱遁は、世を遁れ、所謂隱遁の如く世には見えずと御自分も仰しやつて居るなるほど隱遁に違ひない。今までは鎌倉の街頭に、或は幕府の権臣を相手にして師子吼した行者が、一朝鋒を収めたが如く、旗を捲いて去つたが如く、五月雨の空に鎌倉を去つて身延の山の中にお入りになつた。

「去る文永十一年五月より此の弘安にいたるまで八ヶ年が間此の山一步も出でず候」
 といはれる、その一步も出でずといふ決心は何であるか、形は隱遁の如く見えるが、しかし末法弘通の本據を定め、その源泉を築き上げる爲には、たゞ世間に出て世と闘ふのみが能でない。こゝに一つ根據

を定めて、そこに入入りするところの弟子、門人を督勵し、習學を奨勵し、行を修めしめ、さうしてそこからそれを根據として、必要ならば何時でも何處へでも斬つて出るといふ、その素養と準備を整へられた、それが身延八年の御生活であつたやうに私は思ひます。隨て弘安元年のあの時に鎌倉に於て何か宗論でもありさうだといふ時でも、チャントその方策を定めて、マアこれは御書に依つての私の推測であります、三位房日行を先陣に立て、次いで日朝が出て、さうして最後天下分け目の時になれば、日蓮自らも身延を出て鎌倉に出ても宜いといふお考へであつたらうと思ひます。がその望まれた所の宗論も遂に出來ず、最後まで身延にお籠りになつた、あの身延隱遁は決してたゞの退隱ではない。形は世を通れた如くで、しかも實はその當世、當時に對して闘ふのみならず、末法萬年の爲の戰の準備を整へ根據をそこに定められたものであると思ひます。

日生上人がその點に就てどういふお考を持つて居られたかは、私はそれらを十分確める機會を失ひました、それを今こゝに追憶して、どういふお考を持つて居られたかといふことを、こゝで考究するよりも、私はこの門下の諸君、否、この門下だけでなく、廣く宗教家、殊に日蓮門下の人々が、布教、興學の上に於て世間に斬つて出ること、根據を定めてその本據を固くすること、その二つの關係、調

節を忘れないやうに願ひたい。
 これを以て、私の日生上人の御一生の傳道、活動に對する追憶と共に、それから得た所の、少くとも私はそれから一つの教訓を得たやうに思ひますがその教訓に依つて將來に對する希望を申述べて、今日の責任の一端を果すことに致したいと思ひます。
 (拍手) (文責在記者)

新 加 盟 者

- | | | | | | | | |
|-----------|-------------|---|---------------|------------|---|----------------|-----------|
| 東京市芝區琴平町二 | 川 村 義 一 殿 | 同 | 日本橋區南茅場町九 | 添 田 吉 美 殿 | 同 | 芝區三田四國町一ノ七 | 小 林 征 治 殿 |
| 同 | 瀧野川區中里町一七七 | 同 | 名古屋市東區撞木町一ノ一 | 伊 藤 爲 憲 殿 | 同 | 神田區雄子町三三 | 尾 崎 熊 吉 殿 |
| 同 | 太田 佐 治 磨 殿 | 同 | 千葉縣安房郡館山 | (石上愛子氏御紹介) | 右 | 同 所 | 尾 崎 一 朗 殿 |
| 同 | 淺草區東三筋町十四 | 同 | 東京市牛込區神樂町二丁目三 | 中山 重 康 殿 | 同 | 横濱市神奈川區岸の根町六三七 | 小 泉 文 柄 殿 |
| | 國 原 鐵 三 郎 殿 | | 東京市牛込區神樂町二丁目三 | (北山留吉氏御紹介) | | 同 | 小 泉 文 柄 殿 |
| | (難波芳松氏御紹介) | | 山本 政 次 郎 殿 | | | | |

本部教報

本部の會館落成式を紀元の佳節に舉行してより直ちに本團は其本来の使命に邁進すべく茲に帝國に於ける最も意義深き布教道場として八萬四千の經王たる法華經講堂を開闢した時代を匡救すべき根本對策は人心教化にあること今更論すべき限りでない、而して人心教化には何によるか、云ふ迄もない宗教信念を開發することである。末法吾等の爲めに遣し給へるこの法華經の明教をば、一人から一人へと徹底せしむる所に、小は一人人より家庭より大にしては國家も世界も浮び上がるものと疑ひない。この貴い奉仕を本團は帝國の中央に致す機會を與へられた事は何と幸福ではあるまいか、佛天は本部の爲めに特に優遇されつゝある感を深くする。依つて謹みて聖祖御降誕の翌日たる二月十六日から開講に決した。講師は現代第一人者たる小林一郎先生である。求道の淳善佛子七十餘名は待ち備へたやうに初講から時間正しく來聴される。毎週木曜日午後七時より八時半迄規律正しく先生獨特の無難辯を振はれ來聴者は回を重ねるに従つて増加することば法國の爲め歡びに堪へない貴い事共である。經中には自分が行けないで他人を勤めて聞かしむる功德さへも

が如來の御智慧でも計り知り難いとさへ讚歎遊ばされてゐる、前に一度聴いたからさか、他の方面で聴くからと捨て去るべきでない。況んや若しも聴くを欲せず却て之を嫉みしめる者の罪は極めて恐ろしいであらう。護法愛國の士女は大に萬難を排して來聴し、之を活用して戴きた。

日曜日講演 二月十九日第一回の講演を初めた。先づ午後二時より法要厳修終つて磯部滿事氏開會の辭を述べ、次に河合勝明氏は日蓮聖人開目抄講義を開始し、爾來毎日曜日には同師會の僧侶一名宛に依つてこれを繰りかへされて來た。

三月五日の日曜日は河合氏の續講と榎木顯正師の「日蓮聖人の處世觀」を題して有益なる講話があつた。又十九日は河合氏の外に山口智光師の「日本國と彼岸の精神」に就ての講話に浴した。

横濱教信

法悅協會の寒行會 會主磯部滿事先生の東京御移轉に依つてその續行に一抹の不安の影を呈した昭和八年度法悅協會寒行會も、先生の殆んど毎夜東京からの御出講に依つて、又例年の如く大いに盛んなるを得たのである。私達の寒行も、回を重ねること日に七度。各會員の家庭を毎夜巡迴しては、年毎に、先生から法華經や佛書に就いての含蓄深い解説を承つて來たのである。

二十七日 小西師が御來濱の客であつたのだが、御都合あつて、磯部先生が代つて講話された。

一、道を以て樂を受く 夜七時 三ッ澤 齋藤 氏宅

千葉縣幕張町教報

榎木顯正師の自坊長嶺寺所在地區たる千葉縣幕張町長作區は同師の骨折で多少宗教的自覺へ近づいて來た事は嬉しい、同區の青年團員も時代の覺醒の第一歩として、二月二十日午後一時より長作小學校に於て津田沼町大久保區榮華堂に非會時對策大講演會を開いた。寒明け後の十六日に降つた大雪がお天氣でトケる爲に道はグチャグチャだが青年達は榎木師の指導のもとに、支部長始め役員總高で十八日は地方有志への案内にポスター貼りに寒さもものは一同大奮であつた。當日は上天氣で四方から集まつた聴衆は長作青年團員七十名を加へて二百三十餘名、午後四時盛會裡に講演會を終ると同校庭で講師を中心とする團員の記念撮影了つて、榎木師のお寺で講師貴族院議員男爵井上清純閣下を中心に團員の茶話會を開き、閣下の有益なる時局談があつて席上閣下には團員の爲に記念御揮毫を頂いた閣下は人も知る如く熱烈な日蓮主義者であられるので其の御揮毫は日蓮聖人の御言葉「源遠流長」の中の「流長」の二文字である。同六時大久保青年團員が自動車でお迎ひ、長作

榎木顯正師の自坊長嶺寺所在地區たる千葉縣幕張町長作區は同師の骨折で多少宗教的自覺へ近づいて來た事は嬉しい、同區の青年團員も時代の覺醒の第一歩として、二月二十日午後一時より長作小學校に於て津田沼町大久保區榮華堂に非會時對策大講演會を開いた。寒明け後の十六日に降つた大雪がお天氣でトケる爲に道はグチャグチャだが青年達は榎木師の指導のもとに、支部長始め役員總高で十八日は地方有志への案内にポスター貼りに寒さもものは一同大奮であつた。當日は上天氣で四方から集まつた聴衆は長作青年團員七十名を加へて二百三十餘名、午後四時盛會裡に講演會を終ると同校庭で講師を中心とする團員の記念撮影了つて、榎木師のお寺で講師貴族院議員男爵井上清純閣下を中心に團員の茶話會を開き、閣下の有益なる時局談があつて席上閣下には團員の爲に記念御揮毫を頂いた閣下は人も知る如く熱烈な日蓮主義者であられるので其の御揮毫は日蓮聖人の御言葉「源遠流長」の中の「流長」の二文字である。同六時大久保青年團員が自動車でお迎ひ、長作

榎木顯正師の自坊長嶺寺所在地區たる千葉縣幕張町長作區は同師の骨折で多少宗教的自覺へ近づいて來た事は嬉しい、同區の青年團員も時代の覺醒の第一歩として、二月二十日午後一時より長作小學校に於て津田沼町大久保區榮華堂に非會時對策大講演會を開いた。寒明け後の十六日に降つた大雪がお天氣でトケる爲に道はグチャグチャだが青年達は榎木師の指導のもとに、支部長始め役員總高で十八日は地方有志への案内にポスター貼りに寒さもものは一同大奮であつた。當日は上天氣で四方から集まつた聴衆は長作青年團員七十名を加へて二百三十餘名、午後四時盛會裡に講演會を終ると同校庭で講師を中心とする團員の記念撮影了つて、榎木師のお寺で講師貴族院議員男爵井上清純閣下を中心に團員の茶話會を開き、閣下の有益なる時局談があつて席上閣下には團員の爲に記念御揮毫を頂いた閣下は人も知る如く熱烈な日蓮主義者であられるので其の御揮毫は日蓮聖人の御言葉「源遠流長」の中の「流長」の二文字である。同六時大久保青年團員が自動車でお迎ひ、長作

榎木顯正師の自坊長嶺寺所在地區たる千葉縣幕張町長作區は同師の骨折で多少宗教的自覺へ近づいて來た事は嬉しい、同區の青年團員も時代の覺醒の第一歩として、二月二十日午後一時より長作小學校に於て津田沼町大久保區榮華堂に非會時對策大講演會を開いた。寒明け後の十六日に降つた大雪がお天氣でトケる爲に道はグチャグチャだが青年達は榎木師の指導のもとに、支部長始め役員總高で十八日は地方有志への案内にポスター貼りに寒さもものは一同大奮であつた。當日は上天氣で四方から集まつた聴衆は長作青年團員七十名を加へて二百三十餘名、午後四時盛會裡に講演會を終ると同校庭で講師を中心とする團員の記念撮影了つて、榎木師のお寺で講師貴族院議員男爵井上清純閣下を中心に團員の茶話會を開き、閣下の有益なる時局談があつて席上閣下には團員の爲に記念御揮毫を頂いた閣下は人も知る如く熱烈な日蓮主義者であられるので其の御揮毫は日蓮聖人の御言葉「源遠流長」の中の「流長」の二文字である。同六時大久保青年團員が自動車でお迎ひ、長作

寒三十日と云ふが、本年は曆の關係で期間は一月六日より二月三日に至る二十九日間であつた。講本は種々御振舞御書、週家庭は二十一軒、出席者延人員實に四百九十七名。内皆勤者七名、前講として、先生の講話に先立ち、若上浦三郎氏が、日生上人の「釋迦如來」を御讀された。會、期間中の重だつたことば次の如くである。

一月七日：寒行第二夜の此日は、丁度東京統一會館の新年會に相當したので、會員中の有志十一名は上京出席、散會後、階上御賓前で動行。同十八日：小西日喜師東京小松川より御來講、午後金子氏宅夜岩上氏宅で講話。

同二十日：和賀義見師東京瀧野川より御來講午後貝塚氏宅夜石毛氏宅で講話。同二十四日：若上金子貝塚の三氏協會員を代表し、磯部先生を新居東京統一會館に御訪ねし、會員より先生への謝恩記念品捧呈。同二十七日：小西師御來講、夜齋藤氏宅にて講話、同二十八日：寒行中の此の一夕を横濱法華會と合流し千歳裁縫女學校に公開講演會開催「法華經の妙旨」磯部滿事先生。「新時代の佛敎」小林二郎先生。

二月一日二日三日の夜は、一月から繰越して來た寒行會で、西村、川又、石毛諸氏の宅に於いてツレンム集りを催した。今年の寒行は随分盛んであつた。

同日 磯部先生の御子、大慈院克經獲得日壽信士の第百々日相當のため、磯子の先生舊

青年團幹部と同乗井上閣下を御案内、大久保區の神々にて夕飯を濟ませ七時から榮華堂に於て開會。

會場の内外は青年團員にて守られ盛大に開く事が出來た事は返すも嬉しく感じました。長作小學校にては左の如き順序を以つて開會者小川喬一君の司會のもとに開會。

- 一、開會之辭
- 一、長作青年團支部長 大木 長雄君
- 一、青年よ時代に覺醒せよ 青年團員 齋川 光俊君
- 一、日蓮主義の處世觀 長風寺住職 榎木 顯正師
- 一、時局に直面して 貴族院議員男爵 井上清純閣下
- 一、閉會之辭 青年團副支部長 齋藤 四郎君
- 一、閉會之辭 津田沼町大久保榮華堂にては
- 一、閉會之辭
- 津田沼町大久保青年團支部長 齋藤 茂君
- 一、宗教上より見たる非常時 長風寺住職 榎木 顯正師
- 一、非常時に直面して 貴族院議員男爵 井上清純閣下
- 一、閉會之辭
- 青年團副支部長 松元 正一君

兩方共に聽衆は一粒損りの有力なる地方人のみ、實に十二分の感動を與へ何れも榎木師發聲のもとに 天皇陛下萬歳を三唱して散會し

榎木顯正師の自坊長嶺寺所在地區たる千葉縣幕張町長作區は同師の骨折で多少宗教的自覺へ近づいて來た事は嬉しい、同區の青年團員も時代の覺醒の第一歩として、二月二十日午後一時より長作小學校に於て津田沼町大久保區榮華堂に非會時對策大講演會を開いた。寒明け後の十六日に降つた大雪がお天氣でトケる爲に道はグチャグチャだが青年達は榎木師の指導のもとに、支部長始め役員總高で十八日は地方有志への案内にポスター貼りに寒さもものは一同大奮であつた。當日は上天氣で四方から集まつた聴衆は長作青年團員七十名を加へて二百三十餘名、午後四時盛會裡に講演會を終ると同校庭で講師を中心とする團員の記念撮影了つて、榎木師のお寺で講師貴族院議員男爵井上清純閣下を中心に團員の茶話會を開き、閣下の有益なる時局談があつて席上閣下には團員の爲に記念御揮毫を頂いた閣下は人も知る如く熱烈な日蓮主義者であられるので其の御揮毫は日蓮聖人の御言葉「源遠流長」の中の「流長」の二文字である。同六時大久保青年團員が自動車でお迎ひ、長作

榎木顯正師の自坊長嶺寺所在地區たる千葉縣幕張町長作區は同師の骨折で多少宗教的自覺へ近づいて來た事は嬉しい、同區の青年團員も時代の覺醒の第一歩として、二月二十日午後一時より長作小學校に於て津田沼町大久保區榮華堂に非會時對策大講演會を開いた。寒明け後の十六日に降つた大雪がお天氣でトケる爲に道はグチャグチャだが青年達は榎木師の指導のもとに、支部長始め役員總高で十八日は地方有志への案内にポスター貼りに寒さもものは一同大奮であつた。當日は上天氣で四方から集まつた聴衆は長作青年團員七十名を加へて二百三十餘名、午後四時盛會裡に講演會を終ると同校庭で講師を中心とする團員の記念撮影了つて、榎木師のお寺で講師貴族院議員男爵井上清純閣下を中心に團員の茶話會を開き、閣下の有益なる時局談があつて席上閣下には團員の爲に記念御揮毫を頂いた閣下は人も知る如く熱烈な日蓮主義者であられるので其の御揮毫は日蓮聖人の御言葉「源遠流長」の中の「流長」の二文字である。同六時大久保青年團員が自動車でお迎ひ、長作

- 宅で午後一時より法要があつた。後、小西日喜師、和賀義見師の講演、此日故情聖生前の學友知己が校服で多數參會。今更らに涙を促されるものがあつた。
- 八日 東京瀧野川より和賀師來濱ありて御講話。
- 一、中道の大敎 午後三時 生 麥 貝塚 氏宅
- 一、釋尊と日蓮聖人 午後七時 三ッ澤 岩上 氏宅
- 十一日 東京統一會館の開館式であつたので、横濱からは有志十數名出席、若上浦三郎氏が祝辭を代讀された。
- 十二日 磯部先生、東京より御來講。
- 一、法國宴會 午後七時 神奈川 京田氏宅
- 十四日 中區長谷川氏宅にて集る、磯部先生が御出での客であつたが、御都合にてみえられなかつた。
- 十五日 東京小松川より小西師御來講。
- 一、日蓮聖人の聖誕と守護國家 午後三時 神奈川 石毛 氏宅
- 一、佛涅槃と親の大愛 午後七時 金子 氏宅
- 十九日 磯部先生が東京よりお出でになつた。
- 一、決定信 夜七時 中區 伊藤氏宅
- 二十四日 磯部先生の御講話。
- 一、日什大正師を憶ふ 夜七時 磯子 北山 氏宅

た事は、更に尊く有難く感激したことであつた。長作青年團では之れを契機に青年の人格修養に今後大に善慮しやうと目下協議中である。(暮張青年團報)

二本松教信

十二月六日 午後二時二十一分二本松驛通過にて戦死者遺骨四基仙臺に向ふ因つて出迎ひに隨經す。
同日八日 午前十時六分二本松驛通過にて戦死者一基故郷に向ふ因つて出迎ひに隨經す。
同日十二日 夜於蓮華寺題目講修行。
同日十五日 救済事業二本松佛敎不榮會托鉢修行。
同日三十日 午後二時二十一分二本松驛通過にて第二師團長多門夫人を歓迎す。
一月七日 夜於蓮華寺題目講修行。
一月八日 午前八時二十一分二本松驛通過にて二師團長多門中将凱旋す因つて歓迎す。
同日 午後一時五十七分二本松驛通過にて八師團管下の戦死者の遺骨二基原隊に向ふ因つて出迎ひに隨經す。
同日九日 午前八時二十一分二本松驛通過にて騎兵二聯隊歩兵四聯隊凱旋す因つて歓迎す。
同日十二日 午後四時三十分二本松驛着にて凱旋兵を歓迎す。
同日十三日 午後六時〇八分二本松驛通過にて傷病兵七名仙臺衛戍病院に向ふ因つて出迎ひに隨經す。

同日十四日 午後一時より二本松第一小学校に於て凱旋兵歓迎會舉行す。
同日十五日 救済事業二本松佛敎不榮會托鉢修行。
同日二十日 午後一時五十七分二本松驛通過にて遺骨一基原隊に向ふ因つて出迎ひに隨經す。
同日二十一日 午前十時〇六分二本松驛通過にて佐伯陸軍歩兵中佐の遺骨故郷に向ふ因つて出迎ひに隨經す。
同日二十二日 午前十一時十二分二本松驛通過にて多門師團長瀧澤道中の状況奏上に参内の爲上京す因つて出迎ふ。
同日二十三日 舊年暮にて二本松町外數ヶ村の貧困者に施米す。
同日二十六日 午前十一時三十四分二本松驛通過にて弘前騎兵聯隊渡瀧す因つて歓迎す。
同日二十七日 午後一時五十四分二本松驛通過にて山形聯隊渡瀧す因つて歓迎す。
同日二十八日 午前十一時五十四分二本松驛通過にて弘前歩兵聯隊渡瀧す因つて歓迎す。
同日二十九日 午後四時三十分二本松驛通過にて多門師團長歸郷す因つて歓迎す。
同日三十一日 午後一時二十一分二本松驛通過にて前關東軍司令官本庄繁中將若松に向ふ因つて歓迎す。
二月六日 夜於蓮華寺題目講修行。
同日八日 午後四時三十分二本松驛通過にて戦死者遺骨原隊に歸る因つて出迎ひに隨經す。
同日九日 午後六時八分二本松驛通過にて傷

臺灣教報

同日十四日 午後一時より二本松第一小学校に於て凱旋兵歓迎會舉行す。
同日十五日 救済事業二本松佛敎不榮會托鉢修行。
同日二十日 午後一時五十七分二本松驛通過にて遺骨一基原隊に向ふ因つて出迎ひに隨經す。
同日二十一日 午前十時〇六分二本松驛通過にて佐伯陸軍歩兵中佐の遺骨故郷に向ふ因つて出迎ひに隨經す。
同日二十二日 午前十一時十二分二本松驛通過にて多門師團長瀧澤道中の状況奏上に参内の爲上京す因つて出迎ふ。
同日二十三日 舊年暮にて二本松町外數ヶ村の貧困者に施米す。
同日二十六日 午前十一時三十四分二本松驛通過にて弘前騎兵聯隊渡瀧す因つて歓迎す。
同日二十七日 午後一時五十四分二本松驛通過にて山形聯隊渡瀧す因つて歓迎す。
同日二十八日 午前十一時五十四分二本松驛通過にて弘前歩兵聯隊渡瀧す因つて歓迎す。
同日二十九日 午後四時三十分二本松驛通過にて多門師團長歸郷す因つて歓迎す。
同日三十一日 午後一時二十一分二本松驛通過にて前關東軍司令官本庄繁中將若松に向ふ因つて歓迎す。
二月六日 夜於蓮華寺題目講修行。
同日八日 午後四時三十分二本松驛通過にて戦死者遺骨原隊に歸る因つて出迎ひに隨經す。
同日九日 午後六時八分二本松驛通過にて傷

病兵仙臺衛戍病院に歸る因つて出迎ふ。
同日二十日 救済事業二本松佛敎不榮會托鉢修行。
同日二十五日 午後六時八分二本松驛通過にて傷病兵仙臺衛戍病院に歸る因つて出迎ふ。

十二月九日花蓮港廳新城支廳、十日鳳林支廳、十一日花蓮港廳警務課等の各所より招聘され東臺灣新聞の報する如く何れの武徳殿に於ても時節柄社會教化の爲講演することとなり、新城支廳は花蓮港廳より五六里北方にあり九日自動車にて行き午後七時より武徳殿に於て約二時間半に亘り左の講演を試みた。
○日本主義とは何ぞや、と題し聽衆は支廳職員始め丁度當日は各派出所警官召集日に幸ひ多數の警官や役場其他街民の聽衆に盛大であつた。
講演が終つて妙明術の實驗に移り十一時迄四時間ぶつ通しであつたが聽衆は皆大に感激し十一時過ぎても歸るを知らず、日蓮主義と信仰に就て質問戦が起り結果皆大に満足した二時、實に愉快であつた。
翌十日午前八時同所より自動車で歸花し直に鳳林支廳へ向ふ同支廳は花蓮港より汽車で二時間かゝる所同支廳主催にて武徳殿に於て午後七時から支廳と役場職員に對し左の講演を試み之をも法益はかなりあつた様である。

○日本國體に就て と題し聽衆は僅か六十餘名であつたが、我日蓮主義に感動され講演が済んでから矢張りこゝでも種々の質問が起つたが、中には扇を逆にして自分の「丁度此様に佛敎は各家とも皆此山の峰に登るのであるから何れから登つても先きは同じ峰で出會から行く道は違つても誰も好きな方から登るがよいと考へますが如何」と問はれた、故に之を左様な山に登へて申上れば、それは表面から見られたので其奥はまだハッキリお分りになつて居ないからであると思ふ、成程上ツ面から見ますと小道でも峰に向つて眞直に通つて居る様に見えて居れば、先づ誰れも夫れが峰に行く道だと思つて折角本當な大道があつて之れが峰に登る正道であるが、如何せん、如何せん、なぜなれば其奥を知らずには唯だ上ツ面を見た計りであるから、如何に之が本當の道だと教つてあつてもそれが一寸横の方へ向いて居れば可笑いと思つて或は遠く近くと思つてか、先づ小道でも眞直に峰に向つて居る様に見れば其方が早くて間違もないと思ふかも知らんが、矢張り多くの人達は左様な方面をお好みになる様であります。それが誤りである。法華經の方便品と云ふお經の中に、「十方佛土中唯有一乘法無二亦無三」とあり又「正直捨方便但說無上道」と説かれてあるのが即ち此の時に登れる本當の大道である。眞直に登れる様に見える所の小道

が種々の方便に例ふるのである、故に最初眞直に峰まで登られると喜んで登りかゝつて見ると途中道が二ツに岐れ三ツに枝がさして居ると云ふ具合で右へ行たり左へ行たり或は登つたり降りたりして中々目的地へは行かれません夫れを迷ひと云ふもので又橋無き渡河にアツカッて其渡河を渡らんとするに誤つて押流されたり或は岸から轉がり落ちてじめぬ死なざるを爲すものもあらう之地獄でも申しまじやうか、とかく左様な事になつてはいかんから正直に方便の小道を拾つて但無上道たる大道(法華經)を信じなければならぬ。無量義經の説法品の中に、「以佛眼觀一切諸法不可宣說所以者何知諸衆生性欲不同性欲不同種々說法種種說法以方便力四十餘年未顯眞實是故衆生得道差別不得疾成無上菩提」とビシシと鑿ををらされてあります。そこで、「十方佛土の中には唯だ一乘のみあり」と言はれた『法華經』に由つてこそ初めて其の安心立命を得られる事に相成るのである云々と説き答へて見たが、聽衆は云く初め結構なお話を拜聴したまらぬ程であつたのであつたが實に愉快でたまらぬ程であつた。
十一日鳳林支廳を發し花蓮港へ歸り警務課主催にて武徳殿に於て午後七時半より約二時間亘り左の講演を試みた。
○日本主義とは何ぞや、と題し聽衆は廳員警察等官民の多數で非常の盛會裡に終了した翌十二日は午前八時發の自動車にて歸途す

の教習務課より再相談に同八時より警察官丈に對し一時間でもよいから精神講話を願はれんかとの申込に武徳殿に於て午前八時から一時間餘左の講演を爲した。
○日蓮主義と道徳の根元 と題し聽衆は僅か六十餘名であつたが皆感ずる所もあつたと見えて多くの人が手帳を出し筆記され講演終るや聽衆は皆よいお話を聴かして貰つたと語りながら散會した。同地は十二日午後十二時半自動車にて三十一里の間東洋でも有名な「大タロコ」の片鱗實に東臺灣に於て最近驚異的新風景として世に喧傳せられ遂に國立公園候補地となつた處であるが又其途中一朝誤れば何千尺さも輪が深谷或は海中に落ちむ様な驚異な箇所が深山あるそこを通つて臺北州下蘇澳に至り同所より汽車にて臺北へ向つたのである。

日暮氏の質疑應答は、紙面の都合に依り來月號へ。

寄附金圖費誌料領收

(自二月二十一日至三月二十日)

一 金貳圓貳拾錢也	東京 川村 義一殿	一 金拾	四也	東京	井上道太郎殿	一 金壹百圓也	同	山田 三良殿
一 金貳圓貳拾錢也	東京 大澤 イシ殿	一 金拾	圓也	同	柴田 武治殿	一 金四拾圓也	同	小澤 元重殿
一 金貳圓貳拾錢也	山形縣 村川源次郎殿	一 金壹圓貳拾錢也	同	同	鈴木 教友殿	一 金五圓也	同	東京 黒田あい子殿
一 金貳圓貳拾錢也	東京 添田 吉美殿	一 金貳	圓也	同	松岡銀次郎殿	一 金六圓也	同	東京 榊原覺次郎殿
一 金貳圓貳拾錢也	名古屋 伊藤 爲憲殿	一 金五拾	錢也	同	山田 敏夫殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	東京 太田佐治殿
一 金壹圓六拾錢也	福岡 柴田喜太郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同	山田 英二殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	東京 國原鐵三郎殿
一 金壹圓六拾錢也	東京 藤見 マン殿	一 金拾	圓也	同	沼部彌太郎殿	一 金五圓也	同	後藤源次郎殿
一 金參	同 藤田淺次郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同	田中峰太郎殿	一 金六圓也	同	同 尾崎 熊吉殿
一 金四拾壹錢也	同 砂川 清七殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同	竹内太八郎殿	一 金六圓也	同	同 尾崎 一郎殿
一 金壹	東京 須賀 砂川 清七殿	一 金參	圓也	同	島 龜太郎殿	一 金參圓五拾錢也	同	同 菊地 雄三殿
一 金貳圓貳拾錢也	東京 鳥谷正三郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同	横山 正三殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	茨城縣 中崎 米殿
一 金貳圓貳拾錢也	千葉 中山 重康殿	一 金五	圓也	同	同 田中 米吉殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	神戶 清水 正藏殿
一 金貳圓貳拾錢也	東京 中村菊次郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同	小田原 中村 銀藏殿	一 金壹	圓也	北海道 木村 茂殿
一 金貳圓貳拾錢也	同 青山 信市殿	一 金貳	圓也	同	群馬縣 谷本 繁殿	一 金五	圓也	横濱 長谷川福太郎殿
一 金貳圓貳拾錢也	大阪 小池 芳松殿	一 金參圓六拾錢也	同	同	大坂 友廣 才少殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同 小泉 文柄殿
一 金貳	東京 宇野 博順殿	一 金貳	圓也	同	神戶 舟橋 英一殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同 山梨縣 大野 日通殿
一 金五拾	同 日下部二葉殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同	淡路 吉岡正太郎殿	一 金壹	圓也	東京府全生病院唱行會殿
一 金壹	奈良縣 出口馬太郎殿	一 金貳圓四拾錢也	同	同	東京 松岡銀次郎殿	一 金參	圓也	東京 岩瀨 十次殿
一 金四圓四拾錢也	富山縣 賀久 嘉藏殿	一 金五拾	錢也	同	同 山田健治郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同
一 金貳圓貳拾錢也	同 新渡消防七所殿	一 金五	圓也	同	釜山 池田 金作殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同
					東京 小林 征治殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同
					山本政次郎殿	一 金貳圓貳拾錢也	同	同

右難有人帳仕候也

財團法人統一團會計

本多日生上人名著在庫品特價提供

- 一 聖語錄 改版 特價 金壹圓八拾錢 送料共
- 一 日蓮主義本領 全 金貳圓拾錢
- 一 法華經要義 全 金貳圓五拾錢
- 一 日蓮主義心髓 全 金壹圓五拾錢
- 一 日蓮主義精要 全 金貳圓九拾錢

一本多日生上人 特價 金壹圓七拾錢 送料共

申込所 東京市小石川區音羽町六ノ一七 財團法人統一團 振替東京九四二〇番

一月「教」誌 定價一冊 金拾錢 送料共 金五厘 一ヶ月前金 金壹圓貳拾錢 送料共

統一定價		統一廣告料	
一冊	金貳拾錢	表紙一頁	金貳拾圓
半冊	金壹圓貳拾錢	一頁	金拾圓
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	四頁	金九圓
		五分	金五圓
			送料共
			送料共
			送料共

昭和八年三月廿四日印刷 昭和八年四月一日發行 (第四百五十七號)

編輯兼 發行所 東京市小石川區音羽町六丁目一七 印刷所 東京市品川區南品川二丁目一八一

發行所 東京市小石川區音羽町六丁目一七 財團法人統一團

電話牛込五三三六番 振替東京九四二〇番

次 目

聖 語

法華經の信解(完結)……………日生上人

日生上人と統一の大教……………床次竹二郎

本多上人の遺業を奉じて……………小林一郎

記 事

○質疑應答

○各地教信

○本部團報

○寄附團費誌料領收

第三十八年五月號

統

一

法財
大團
統
一團發行